



須賀川の人物史



本書は、元須賀川市文化財保護審議会委員の永山祐三さんが執筆したものを複製し、編集したものです。

筆者の「須賀川の人物史」に対する思いを歴史と文化に触れながらご一読いただければ幸いです。

広報すかがわ 掲載

須賀川市立博物館 編集

須賀川の人物史

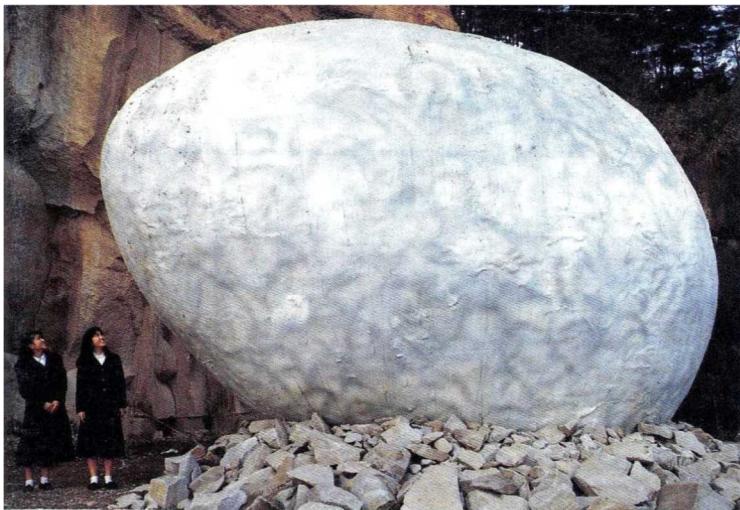
もくじ

掲載年月	タイトル
1988.01	①円谷英二 ゴジラやウルトラマンの生みの親
1988.02	②柳沼源太郎
1988.03	③服部ケサ
1988.04	④須田善二 (珙中)
1988.05	⑤市原多代女
1988.06	⑥小林久敬
1988.07	⑦岡部宗城 初代須賀川市長
1988.08	⑧坂本鉄藏 須賀川名誉市民第1号の
1988.09	⑨矢部保太郎 俳諧一筋に生きた
1988.10	⑩太田三郎 太田総合病院の創始者
1988.11	⑪円谷幸吉 東京オリンピックマラソン3位
1988.12	⑫藤井晋流 時雨塚の建立者
1989.01	⑬亜欧堂田善 日本銅版画の先駆者
1989.02	⑭太田貞喜 亜欧堂田善コレクションを蒐集
1989.03	⑮首藤保之助 考古資料の蒐集に奔走した
1989.04	⑯相楽等躬 須賀川俳諧の祖
1989.05	⑰伊藤佑倫 牡丹園の祖
1989.06	⑱可伸庵栗斎
1989.07	⑲渡辺光徳 銅版画家
1989.08	⑳広瀬嘉吉 うずもれていた洋画家

- 1989.09 ㉑石井雨考 青蔭集を編集した
- 1989.10 ㉒岩瀬御台 政略の犠牲になった姫
- 1989.11 ㉓大乗院 須賀川最後の城主
- 1989.12 ㉔須田美濃守盛秀と天仙丸 須賀川城代
- 1990.01 ㉕安藤辰三郎 須賀川ガラス創始者
- 1990.02 ㉖水野仙子 自然主義を代表する女流作家
- 1990.03 ㉗張堂大龍 入木道第四十六世を継承
- 1990.04 ㉘豊竹姫太夫 関下人形座育ての親
- 1990.05 ㉙角田磐谷 牡丹に魅せられた画家
- 1990.06 ㉚橋本傳右エ門 近代須賀川の礎を築いた
- 1990.07 ㉛白井北窓 昌平黽で勤王志士を育てた
- 1990.08 ㉜白雲 集古十種を編纂した画像
- 1990.09 ㉝道山草太郎 桔梗吟社創設者の一人
- 1990.10 ㉞市原貞右衛門綱稠 江戸末期須賀川の隆盛を図った商人
- 1990.11 ㉟山田仙吉 田善の絵馬を奉納した世話人
- 1990.12 ㉟樽川源朝 須賀川羽子板生みの親
- 1991.01 ㉞安積覚兵衛覚 「水戸黄門」格さんのモデル
- 1991.02 ㉞建弥依米命ほか 古代から中世編
- 1991.03 ㉞石川昭光ほか 近代から現在編

2020.08 編集

※ 記載内容は、約30年前のものであり、建造物や歴史的見解等現状とは異なる部分がありますのでご承知ください。



昭和六十二年九月某日、突如、乙字ヶ滝石切場に巨大な卵が出現したとマスコミによつて報道された。奇しくも、この地は昭和四十一年八月、考古学に魅了された少年佐藤重寿（当時岩農校二年生）によつて約二万年前の旧石器が発見されたロマンの地である。

この巨大な卵は須賀川青年会議所会員らによつて、須賀川をゴジラの里にしようという発想のもとに仕掛けられたものであつた。また、十月七日の鎮守秋祭りの夜行われた御輿パレード

の中に大きなゴジラ山車が引き出された。これは上北町若連の労作であつた。

ゴジラは数百万年前地球上に生息していたという架空の動物である。このゴジラが昭和二十九年、突然東京湾から芝浦付近に上陸して東京を襲つたのであつた。この場面を見ていた人々、特に少年たちは驚愕と歓喜の声をあげたのであつた。場所は東

須賀川の人物史

ゴジラやウルトラマンの生みの親

円谷英二（一九〇一～一九七〇）

た。宝系映画館のスクリーンであつ

ここでゴジラの生みの親の登場である。それは、世界の映画界から特撮の神様といわれた円谷英二であった。

三十四年七月十日、中町の粂屋大東屋の長男として生まれ、幼くして母に死別した英一は祖母に養育された。少年のころから二字ヶ滝のすぐそばに出現した話題の巨大「ゴジラの卵」

飛行機に興味をもち十六歳で上京就職したが半年で退社して、彼のあこがれの的であつた日本飛行学校に入学。その後、神田電気学校で勉強。十八歳のとき日本天燃色活動に入社して映画製作の第一歩を踏み出した。三十六歳のとき東宝に特殊技術課が創設され、以後、特撮映画を次次とスクリーンに送り出した。特に、「ハワイ、マレー沖海戦」は映画界に初めて特技の必要性を認識させた代表作の一つであ



永山祐三さん

期待下さる。

今田町から「ふるさと再発見」の一つとして、本市が生んだあるいは本市にゆかりのある人物を取り上げ、その業績や生涯、人となりを紹介する「須賀川の人物史」をシリーズで掲載します。執筆者は、北町の永山祐三さん(五三)です。永山さんは治場経営の傍ら、市文化財保護審議会委員として活躍、さらに須賀川市史や水道五十年史など数多くの郷土史編さんに携わっている郷土史研究家でもあります。

「須賀川はすぐれた自然環境に恵まれ、古くから城下町、商人の町として栄え、文人墨客の交流も頻繁に行われていました。そ

る。前述のゴジラは五十五歳のときの作品である。その後、各種の怪獣シリーズ映画を製作したが、昭和三十年代後半、特に東京オリンピックを契機にテ

氣管支喘息に伴う狭心症の発作で六十八歳の生涯を閉じた。市博物館にはウルトラシリーズで使われた怪獣シユガロが展示されている。(永山祐三)



ゴジラに演出中の田谷英一特撮監督

ビが普及した。ここに現れたのが「ウルトラQ」シリーズであつた。この当時生まれ、育つた子供たちは、テレビにくぎ付けされたように見入つたのであつた。これらの映画やテレビを見ながら育つた人たちが今、中堅となつて、ゴジラの卵を仕掛けたりしながら、町の活性化をはからうと働いているのである。



牡丹園内にある柳沼源太郎翁像



須賀川の人物史

②

柳沼源太郎

(一八七五～一九三七)

ぼたぼたと肥くむ朝の牡丹哉

この句の作者は柳沼牡丹園の園主であった、柳沼源太郎である。彼は俳号を「破籠子」といい、原石鼎に師事。矢部梧郎、道山草太郎と共に桔槔吟社を創立した俳人であった。

彼は、牡丹の開花期に訪れる観客に満足のゆく見事な花を見せるには、四季を通しての手入れしかないと寝食も忘れ心血をそそいだ。特に、冬の手入れ、寒肥は大事な仕事であった。七十年前、彼に師事し俳句の手ほどきを受けた水野武平（夷内八十九歳）は「冬になると源太郎さんは作男たちと一緒に下肥を担ぎ、牡丹の根元

明治初年伊藤家の薬種用の牡丹畑を譲り受けて、観賞用の牡丹園として整備にかかっていた。

彼は牡丹園を計画どおりの軌道に乗せるには専門的に農業の勉強をしなければならないと、十五歳のときに上京。開成中学を経て東京農科大学に学んだ。帰郷後は家業の糸八木屋を弟に任せて、牡丹園に入り、牡丹と共に寝起きし、牡丹の下僕となつた。

園主より身は芽牡丹の奴かな破籠子

に穴を堀つて寒肥をやつていた」と当時を思い出して話してくれた。

源太郎は、明治八年七月六日、中町の商家「糸八木屋」の長男として生まれたが、柳沼家では

明治初年伊藤家の薬種用の牡丹畑を譲り受けて、観賞用の牡丹園として整備にかかっていた。

彼は牡丹園を計画どおりの軌道に乗せるには専門的に農業の勉強をしなければならないと、十五歳のときに上京。開成中学を経て東京農科大学に学んだ。帰郷後は家業の糸八木屋を弟に任せて、牡丹園に入り、牡丹と共に寝起きし、牡丹の下僕となつた。

その後、第二次世界大戦によ

る戦中、戦後の混乱期を迎え、

牡丹園も例外ではなく苦境に立

たされたが、柳沼一族が手を取

りあつて難局を切り抜け、現在

の牡丹園に引き継いだのである。

彼は、現在の法人化されて整

備された牡丹園のあるべき姿を

予期しながら、この世を去った

のではないかと思われる。

昭和十四年十二月二日没、六

十二歳であった。

このようにして牡丹と共に一

(永山祐三)



高松宮殿下御臨席のもとに行われた顕彰碑の除幕式

須賀川の人物史 (3)

服部ケサ (一八八七—一九二四)

公立岩瀬病院の正門に入った左側に女性のレリーフがはめ込まれた碑がある。この碑は、人

が最も忌み嫌つた病「癩」の患者救済事業に心血を注いだ女医・服部けさ子の顕彰碑で、昭和三十一年五月二十一日、服部けさ子史顕彰会(会長 杉原文吾)によって建てられ、高松宮殿下

のもとに、志を同じくする川上チヨと共に、大正十三年十月一日、日本人として最初の癩専門の鈴蘭医院を草津栗生村に開業する。しかし、患者への献身的な貢献と医院建設で心身共に疲

れ果てたケサは、開院二十三日めの大正十三年十一月二十二日午後七時三十分、心臓麻痺で四十年という若さでこの世を去った。

彼女は医専在学中に洗礼を受けた信仰の厚いキリスト教信者で、「人その友のために生命を捨てる、これより大なる愛はなし」という彼女の言葉は清純な生涯そのものであった。

御臨席のもとに除幕式が行われた。

ケサも少女のころから文学を志したが、家族が病気になり、その苦しむ姿を見ながら看護にあたつたのがきっかけとなつて医学の道を選び、東京女子医学専門学校(現東京女子医大)に入

た。

めに捧げる決心をし、その後、癩治療について府立全生病院長、光田健輔の指導を受けて修得した。

大正六年、癩患者の救済と伝導がイギリス人コンウォル・リード女史によつて行われていた群

馬県草津温泉に医師として赴任し、聖バルナバ医院を開設した。

当時、日本の救癩事業は外人の手にゆだねられていることを知つた彼女は、日本の癩患者の救済は日本人の手でとの決意

のもとに、志を同じくする川上チヨと共に、大正十三年十月一日、日本人として最初の癩専門の鈴蘭医院を草津栗生村に開業する。しかし、患者への献身的な貢献と医院建設で心身共に疲

れ果てたケサは、開院二十三日めの大正十三年十一月二十二日午後七時三十分、心臓麻痺で四十年という若さでこの世を去った。

(永山祐三)



須賀川市では、昭和三十七年八月、多目的に活用できる施設として、市体育館を建設した。その舞台に設置した緞帳は「ばたんの町須賀川」にふさわしい図柄で、古木に緋牡丹が咲き競う絢爛豪華な西陣織である。市体育館の緞帳の原画^{写真}の製作者は、日本美術院同人で、



須賀川の人物史

須賀川の人物史

④

須田善二（珙中） 一九〇七～一九六四

東京芸術大学美術学部教授の須田珙中画伯である。

彼は本名を善二といい、明治四十年一月二十一日、東一丁目三十七番地（南町）、通称三丁目の雑貨商、須田善太郎の三男として生まれた。当時の三丁目は奥州街道須賀川の南の商店街として鏡石、矢吹などの近郷近在からの買い物客で繁盛していた。

美術学校における彼の技量は目覚ましいもので、一年生のときに「ぶどう畠」が日本画会展に入選、受賞。二年生の昭和四年三月、第二回聖徳太子奉讃展に「旦雪」が入選したが、学則による「在学中許可なくして官展へ出品する事を許さず」の条項にふれて一週間の停学処分を受け、学内でも問題になつた作品であ

る。この出来事が生涯、画家として歩く道への出発点であつたとての志を立て、私立石川中学校四年に編入。二年間勉学に励み昭和二年、東京美術学校本科日本画科に入学した。

昭和七年十月、第十三回帝展で「白河の夏」が初入選した。このときは前述の学則違反のことがあり、出品許可をあきらめていたが、八月に入つてから突然許可が下り、たまたま帰省途立つて思い巡らせ感じたところがあつて画材として選び、「決死の覚悟」で製作したという。在学中は松岡映丘に学び、帝展に連続入選。昭和九年卒業した。

彼の作風も始めは古典的であったが、前田青嶽に師事し、昭和二十七年、日本美術院展に出品するようになつてから近代的表現の可能性深求に向かう。三十七年院展出品作「吹雪」はその「在学中許可なくして官展へ出品する事を許さず」の条項にふれて一週間の停学処分を受け、いわれている。

院展での主な受賞は大観賞四回、院次賞四回、白寿賞五回を受賞し、昭和三十五年同人に推挙された。昭和二十六年、母校の東京芸術学部に教官として迎えられた。学生に教えることによって自身の画業の進歩を図りつつ、新しい日本画の表現によつて絵画を語らせようと試みながら優れた作品を製作して将来を嘱望されていたが、昭和三十九年七月十日午前四時心筋梗塞のため「珙中芸術」の完成をみることなく五十七歳で急逝した。

残された多くの作品は、須賀川市立博物館や各地の公立美術館、コレクターなどに愛蔵されている。

また、母校の県立須賀川高等学校では彼の業績をたたえ、須田珙中賞を設定。卒業生の中から文化活動に優れた者に授与している。

（永山祐三）

須賀川の人物史

(5)

市原多代女 (一七七六一八六五)

じつとして昇る日を待つ牡
丹哉
あぶなしと見るまで開く牡

丹かな
夕かげにくくりはじめるぼ
たん哉



多代女作牡丹の句入り美人画 (芳虎筆)

ひとひらに嬉しがる子やち
る牡丹
この俳句は、江戸時代末期
の女流俳人を代表する市原多
代女が、牡丹の一日の生態を
詠んだものである。

多代女は、安永五年（一七
七六）市原本家七代寿綱の四
男三女の末娘として生まれた。
市原家は酒造業を営むかたわ
ら、道場町（現在の宮先町の
一部と池上町）大庄屋の職に
あつて町会所活動の中心とな
つて活躍していた。彼女が十
七歳のときに分家（縮緬問屋）
綱忠（多代女の兄）が若くし
て没し、跡継ぎがなかつたの
で養女として入り、十九歳のと
き会津若松から松崎常蔵（有
綱）を迎えて二男一女をもう
けた。

彼女が三十一歳のとき、夫

が病死し、その後、三人の子
供（ゆう十一歳、寿祺八歳、
綱雄一歳）を抱えての家業と
家事による心労から神経症と
なつた。

このことを心配した長兄の
綱稠（狂歌、号・峯巒亭酒屋
藏人）は、近所の豪商で俳人
の石井雨考（久右エ門）に相
談して、俳諧の道に入ること

を勧めた。

雨考は、仙台出身の江戸の
医者で俳壇の大立物であつた
鈴木道彦を紹介した。彼女は
道彦に師事し、心機一転して
明るい生活を送り、生涯を俳
諧の道一途に懸けたのである。

文化十一年（一八一四）、
雨考は「青陰集」を刊行した。

これは、俳壇における彼女の
地位が確立されつたことと

を認められたからであろう。
芭蕉を尊敬していた彼女は、
作句のかたわら芭蕉の作品を
研究して自分の立場を守り、
誠実で具体的に句を詠んだと
いわれる。

また、芭蕉崇拝の表れとし
て、八十歳のとき芭蕉ゆかり
の地、十念寺に田植唄の句碑
を建立した。

家業・家事・俳句と一人何
役をもこなし波乱にとんだ一
生を送つた彼女は、俳句集、
俳句刷（一枚物）、俳諧の連
歌、揮毫した幅、短冊などに
約四千句の作品を残し、特に、
「水かきに車はげしや藤の花」
の句は、大正から昭和にかけ
ての小学校唱歌に取りあげら
れている。慶應元年（一八六
五）八月四日永眠した。九十
歳であつた。

（永山祐三）

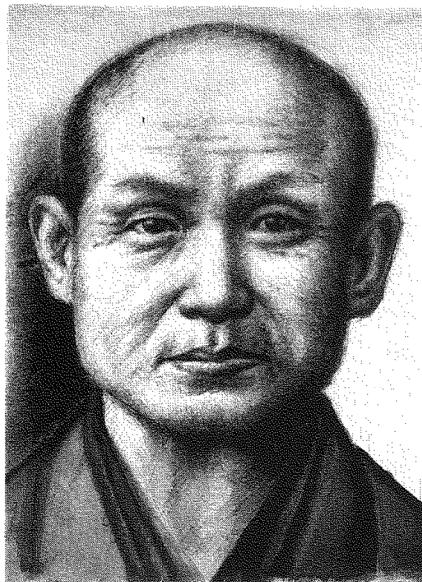
須賀川の人物史

6

小林久敬こばやしひさたか
(一八二一—一八九一)

翁は文政四年須賀川に生まれ代々問屋業をしていたが、當時郡山は水の便が悪く安積三万石の収穫しかなかつたので、猪苗代湖から水を引くため全財産を投げうつて寝食

小林久敬翁の肖像画



久敬は、須賀川中町問屋で町役人を務めていた小林久長の次男として生まれた。彼は明朗活達で一途な性格であつたといわれている。職業柄父親に連れられて旅をしており、六歳の時、初めて猪苗代湖を目にした。この時の印象が脳裏に焼き付き、彼の一生を湖水の水から切り離すことができなくなつたのであろう。そのきつかけとなつたのが、天保の大飢饉であった。この時、子供のころから見ていた岩瀬、安積地方の田畠と荒野に湖水の水を引いたら農業や他の産業の発展につながるのではないかと考えたのだつた。彼の思いはますますつのり、三十歳の時、三森峠に立つて

「湖水の水は必ず岩瀬、安積がくる」と確信して、須賀川の豪商や有力者に協力を呼びかけたが、「途方もないことを言う、気違いだ」と、いわれて見離された。だが彼は、説得して歩き、安積地方の人々から賛同を得て国や県に陳情した。

ところが、時は明治となり、政府と県では、安積と岩瀬地方に入植した開拓土族の授産事業として第一回国債を発行、国の政策によって明治十二年安積疎水の開削を決定した。国では、オランダから招聘した技師、ファンドールンに工事の監督一切をゆだねて、四年間の短期間で完成させた。

この間、久敬も現場に行き、助言をしたが取り入れられな

かつた。しかし、通水式に水門が開かれ湖水の水が安積平野に流れついた時には、彼の三十数年間私財を費して民間人としてできるだけのことをして來た念願が、形がどうであれ叶えられたのであつた。

彼の功績も民間功労者として、明治天皇から銀杯を賜り、新宿御苑の觀菊の宴に招かれその労をねぎらわれた。

若い時から妻子と別れて生活していた久敬は、晩年病氣がちとなり不自由な生活を送つていたが、福祉事業の先覚者、郡山如法寺住職の鈴木信教（一八四二—一八九二）に賓客として迎えられ、明治二十五年五月二十一日、客殿において七十一年の破乱に富んだ一生を終えた。

須賀川の人物史

7

対し市葬をもつて報いた。

した。

吟社(久米正雄、安中俳句会)

昭和二十八年十二月、須賀川町長の岡部宗城は、西袋、浜田両村と須賀川町の合併は「近村にお互いにつながりのある町民各位の隣人愛こそ最もこれを推進する大いなる力

井田、鏡石、大東各村（赤字）財政の克服、牡丹園の法人化など、多くの事業を抱えて取り組んでいたが病に倒れ、昭和三十一年四月八日、七十五歳の生涯を閉じた。

宗城は、明治十四年六月二十五日、大町で勝誓寺住職、岡部靈城の長男として生まれた。幼名を玄龍といい、後に宗城と改めた。彼は、本山の西本願寺で得度し、明治四十三年には布教使として宗門のために活躍した。昭和五年、東京教区管事、築地本願寺輪番（輪番とは会社組織での支

この間、昭和十四年九月から昭和二十二年四月まで福島県議会議員として、その職にあつた。昭和二十六年、帰山していた彼は、須賀川町長に当選、戦後混乱期の町政を担当して現在の須賀川市の基礎をつくったのである。

などと交流し、中央俳壇との交渉も多くなり、大正七年、原石鼎せきていを迎えて桔槔吟社を創立した同人の一人である。このため、乙夜会も十一月に最後の句集を出して解放した。いわば今日の須賀川俳壇の礎となつたのである。

昭和二十八年十二月、須賀川町長の岡部宗城は、西袋、浜田両村と須賀川町の合併は「近村にお互いにつながりのある町民各位の隣人愛こそ最もこれを推進する大いなる力であります」と回覧板で町民に市制促進の協力を呼びかけ、昭和二十九年四月一日官民一体による「須賀川市」が誕生した。

初代市長岡部宗おかべしゆう

城 じょう
/ハハー／たか
ノマニ

とができるインド様式の大伽藍建築に力を尽くして昭和九年竣工した。ちなみに設計は東洋古来の建築学者、伊東忠太であった。

その後、昭和十七年に京都女子専門学校長（現京都女子大学）、昭和三年には札幌別院輪番、昭和二十三年には西本願寺総務、審判院長（西本願寺内裁判長）などの要職を歴任

俳号を句童とつけた。その後、渡辺光徳、岡部卓堂（宗城弟）ら六人で、乙夜会を創立、句集を発行して普及に努めた。明治三十九年、河東碧梧桐（かわひやへいごう）が東北行脚の途中、勝誓寺で一泊、句童庵で句会を催した。等躬（とうきゅう）が三巻と軒の栗二升（りつにせう）芙蓉咲いて下図（ふくらむくろ）なりけり（あお）碧梧桐（へいごう） 欧堂（おうどう）も参加、郡山群峰吟社、笛笙（ふきしょう）

に置き土産として寄贈した。
この幅物は現在市立博物館に
収蔵されている。

先日まで市立博物館で開催されていた「須賀川ゆかりの俳人展」に
元朝や孫が導師の正信句

が展示されていた、これは現住、玄師を詠んだ句といわれ
る。

(永山祐三) 句 章



名誉市民に推戴された坂本氏(50年9月15日)

昭和五十一年春、第一回「財団法人坂本鉄藏育英会」奨学生に選ばれた佐伯佳貞ら六人は、向学の念を抱き志望校に進み、現在は各職場の中堅となつて活躍している。その後、奨学生は延べ四十八人となつた。現在は十一人に育英会から学資金の一部として、毎月四万円を給与している。

育英会の生みの親、坂本鉄藏は、昭和五十年八月、須賀川市内の成績優秀な高校生で、経済的理由から進学を断念する者への一助にと、須賀川市

に一億円を寄付した。市では、

表紙を各戸に配った。これら功績に報いるため、市では「須賀川市名誉市民」制度を制定し、昭和五十年九月十二日第一号名誉市民に推戴した。九月十五日敬老会の席上、当時の澤田三郎市長から坂本鉄

手伝う傍ら町の活性化を図るため、大正九年全町から二十歳から三十歳の青年を会員として募り、須賀川実業青年会を結成、会長に就任した。二年後、二十八歳のとき彼は、須賀川を離れ東京都本郷において食料雑貨の店（現在のスープーマーケット）を開店し

たが、昭和十年代に入り第一次世界大戦の影響で経済界も不況となり物価統制令がひかれ、鉄藏も自営業からサラリーマンとなつた。昭和十五年一月三十日、八十一歳の生涯を終えた。須賀川市では、その功績に対し市葬をもつて報いた。

須賀川の人物史 ⑧

名誉市民第1号の

坂本鉄藏

（一八九五—一九七〇）

寄付金を基本財産として前述の育英会を設立した。

鉄藏に称号記を贈り、その功績と榮誉をたたえた。

また、彼は老人福祉事業にも深い関心をもち数年にわたり敬老の日に祝いの品を贈り感謝されていた。昭和五十年七月には「広報」保存用綴市立商業学校卒業後は家業を

横浜市関東化学研究所に入社。鉄藏は、明治二十八年十一月二十日、西五丁目二番地（現本町）青果商 坂本金三郎の長男として生まれた。宇都宮これは、宅地分譲の先駆けとなつた事業であった。

ちなみに長男の文男さんは東京須賀川会長に推され、郷土発展のため、郷里と東京のパイプ役として尽力している。

（永山祐三）

風呂を出て夕べの巷
さわやかに 梶郎
この俳句は、北町清水湯の
庭にある俳人矢部保太郎の句碑
である。

須賀川の人物史

俳諧一筋に生きた

矢部保太郎

(一八八二—一九六四)

⑨

保太郎は、俳号を梶郎、書
の雅号を邃軒と号して、青年
期から、その活躍はめざまし
く全国の俳壇に名が知られて
いた。

彼が俳句の道に入ったとき
かけは、明治三十九年、教員
として須賀川小学校に転任し
たときに、岡部句童などが中
心となつて結成していた乙夜
会であったという。
しかし、保太郎の祖母は市
原多代女の孫であるところか
ら、当然彼にも俳句の血が流
れていたのである。

保太郎は、明治十五年四月
在りし日の矢部保太郎氏



在りし日の矢部保太郎氏

四日、長沼町字金町七十四番
地内イ号 矢部源次郎の長男
として生まれた。矢部家は代
代長沼藩士であったが、明治
時代前期には酒造業を営んで
いた。明治三十六年、福島県
師範学校本科を卒業後飯坂、
白方、須賀川の各小学校教員
を経て、大正六年、三十五歳
で故郷の長沼小学校長となつ
たが、大正九年四月、病氣の

これらの功績が認められ、
昭和三十三年十一月三日の文
化の日に県文化功労賞が授与
された。

梶郎の俳諧歴五十八年間の
作句は実に六万七千八百句余、
連句六十巻、主な記念碑、頌

徳碑の揮毫二十五基、句碑八
基がある。また、蒐集した資
料は、市図書館と市立博物
館に寄付された。

このように一生を俳諧一筋
に生き抜いた保太郎は、昭和
三十九年三月十日永眠した。
八十三歳であった。

(永山祐三)

ため退職し、須賀川銀行に入
社した。その後、自営の印刷
業を開業したが、大東亜戦争
による統制経済で印刷業界も
統合された。昭和二十年一月
一日、六十三歳で須賀川図書
館長に迎えられた。

春寒や我には大きな事務机
二十二年公民館が設置され、
初代館長を任命(兼任)した。
昭和三十年五月、市図書館
長を退職、以後八十三歳の生
涯を閉じるまで須賀川の人々
から「矢部先生、梶郎先生」と
親しまれて呼ばれていた。

梶郎は、作句の傍ら、古俳句
の研究に没頭した、それは、
多代女の五十年忌のとき、曾
孫市原又次郎(俳号旧池・衆
議院議員)が

虫鳴くや昔語るもわれ一人
の追悼句を詠んだのが、梶郎

須賀川の人物史

⑩

太田総合病院の創立者

太田三郎

(一八六六)一九四九



太田総合病院の創立者、
太田三郎氏は、八幡町出身

地 郡役所前
明治二十八年 太田三郎

これは、一生を地域医療のために貢献した、太田総合病院の創立者、太田三郎の開業広告である。

三郎は、慶應二年十月二十日、須賀川町字西五丁目五十七番地（八幡町）太田虎三の長男として生まれた。

廣告 生儀裏に福島病院、医科大学醫院、日本赤十字社病院等に勤務の處、今般帰郷の上左の場所に醫院を開設し普く患者の治療に従事す

太田家の先祖は須賀川城主二階堂家に仕えたが、落城後は町役人として高年寄、大庄屋の役職にあつた。明治時代、安積郡郡山市中町三十八番地 郡役所前

太田三郎は戸長（町長）を務めた。父虎三は戸長（町長）を務めた。太田三郎は、明治十七年、県立福島医学校（十四年須賀川から福島に移転）に入学。二十一年に最後の医学生として卒業した。その後、福島病院、福島監獄医などを経て、二十六年上京。医科大学国家医学講習科を修了後、佐賀夫人と結婚した。翌二十七年七月七日、日清戦争の勃発により日本赤十字社救護員として広島

合病院本館）を借りて開院した。当時の郡山は人口一万余人で、三十八人と県内で一番の発展地域であった。しかし、本格的な医療施設がなかったので、診療は患者の求めに応じて内科、外科、耳鼻咽喉科、眼科、婦人科など幅広く行つた。庶民の医師を標榜し、休診日はなく往診も断らないことを信条にしていたことから、患者

たちから「木綿医者」との愛称があつたといふ。

彼の医療にかける情熱と病院の発展につなげる目は院外にも向けられ、郡山町の学校本医師会代議員会議長などの要職にあつた。

て診療にあたる一方、政界、財界にも進出し、昭和五年に福島県議会議長、七年に郡山商工会議所会頭、十年には日本医師会代議員会議長などの要職にあつた。

しかし、この陰には、彼の最大の協力者佐賀夫人（大正十三年没）がいたことを忘れてはならないといわれている。

明治、大正、昭和の三代にわたり郡山地方と福島県内の財團法人太田総合病院と改組、

理事長に院長の太田辰雄（五

十四年十二月十一日、郡山市池ノ台百十七番地の自宅で永眠した。八十三歳であった。

太田病院は、昭和二十六年

十八年没）が就任した。現在は、太田緑子理事長（辰雄夫人で三郎の七女）が運営にあたつてゐる。

全國民が
くぎ付けに
昭和二十九年十月二十一日
の午後二時十五分、日本国中
の人々がテレビとラジオの前

にくぎ付けとなつた。東京オリンピック、マーチンスタジアムの国立競技場では、皇太子御一家をはじめ一般観衆七万人が総立ちになり競技場ゲートに日を走らせていた。これは、東京オリンピック、マラソン競争で一位のアベベ

東京オリンピック
マラソン三位

円谷幸吉 (一九四〇～一九六八)

須賀川の人物史

(11)

的なデットヒートが繰り広

げられ、観衆の興奮と大歓声

のなか、ゴール四百㍍前で、

ヒートリのものすごい追い込

みに円谷の力走もついに及ば

ず三位となつた。が、自己記

録を二分短縮した堂々の銅メ

ダルを胸に日本陸上選手では

唯一人、円谷幸吉がマーチンス

タジアム国旗掲揚塔に高々と

日の丸を掲げたのである。表

トリ選手 (イギリス) が競

技場に入り、今日に語り継が

れている一位、三位争いの劇



銅メダルを手に観衆の声援にこたえる円谷幸吉選手



毎年、松明あかしの翌日行われている「円谷幸吉メモリアルマラソン」

また、マラソンに先立ち十
月十四日行われた、陸上一万
㍍に出場した、円谷は世界の

サトウハチローが 賞賛の詩

強豪、イワノフ（ソ連）、ク
ラーク（豪）、ミルズ（アメ
リカ）などと競り合い、二十
八分五十九秒四の好記録で六
位入賞を果たした。

その活躍に感激した詩人の
サトウハチローは「ありがと
う円谷幸吉君」と題して賞賛
の詩を贈った。その一節にと



東京オリンピックのメインスタジアム、国立競技場に2位で飛び込んできた円谷選手（左）。後方のヒートリとデットヒートを繰り広げるが、追い抜かれてしまう

ある。
ちなみに東京オリンピック
陸上日本選手入賞者は、男子
一万㍍6位とマラソン3位の
円谷幸吉、女子八十㍍障害5
位の依田郁子の二人だけであ
る。このとき円谷幸吉、二十
四歳、アベベ、三十二歳、ヒ
トリ、三十歳であった。

ローマでの陸上競技では入賞
者ひとりもなしの日本なのだ
たのむぞ円谷!! たのむぞ円
谷 ボクの呼吸は
円谷のストライドと同じはず
み方になる
九千二百 九千六百
さあ最後だ
ガムーディが出た
クラークが歯をくいしばる
ミルズが外側から 二人をぶ
つこぬいた
ボクは立ち上った
円谷を見た 又見た
イワノフの赤いシャツにつづ
く円谷の姿 入賞だ円谷!!
ありがとう円谷
ボクは泪といっしょに頭を
深くたれた



表彰台に立つ左から2位のヒートリ、1位のアベベ、そして3位の円谷選手。
このときの記録は、1位アベベ2時間12分11秒2で、2位ヒートリ2時間16分19秒
2、3位円谷2時間16分22秒8だった

素直でおと なしい少年

幸吉は、昭和十五年五月十
三日、須賀川町字矢部関二十
一番地（現大町）、農業、円
谷幸七の六男として生まれた。
幸吉は、兄五人、姉一人、
両親との家族構成の中で、末
子だったことから、みんな
にかわいがられて育ち、素直

でおとなしい少年であつたと
いう。
しかし、彼には少年のころ
からスポーツマンとしての素
養がはぐくまれていた。県立
剣道部に入部したが、二年生
のときバレーボール部に移
り活躍していた。この年の夏、
マラソンランナーとしてのき
つかけが訪れたのである。

次ページへつづく



円谷幸吉記念館を訪れた円谷選手のコーチだった畠野洋夫さんら当時の仲間たち

から高校時代

須高・細谷光体操教諭の指導のもとにトレーニングに励み、三年生の秋、東北縦断駅伝（青東駅伝）福島県選手団の一人に選ばれて、めざましい活躍をし、長距離ランナーとして第一歩を踏み出したのであった。この時期、身長一百六十三・五センチ、体重五十三キロであった。

それは、福島県縦断駅伝のランナーが急病で出場できなくなり、そのランナーの代走を頼まれて走り、くしくも区间新記録を出した。その後、

高校時代から活躍

いまだ破れず15人抜き 青・東駅伝の語り草

三十四年三月、須高を卒業した幸吉は、陸上自衛隊郡山

駐屯部隊に入隊。三十六年の青・東駅伝では三区間走り、三区間とも新記録を出し、延べ十五人を追い抜いた。この記録は、大会始まって以来のこととで今まで破られていない。

駐屯部隊に入隊。三十六年の青東駅伝では三区間走り、三区間とも新記録を出し、延べ十五人を追い抜いた。この記録は、大会始まつて以来のことで今まで破られていない。

マラソンレース直後、報道陣の「今一番したいことは何

に次いで、二位になりマラソン代表選手に決定した。この成果が冒頭の光景となつて現れたのであつた。

一万㍍で世界最高記録、併せて日本新記録を出した。

本命のマラソンは四月、毎日マラソンと同時に行われたオリンピック東京大会代表選手選考会で、一位の君原選手に次いで、二位になりマラソン代表選手に決定した。この成果が冒頭の光景となつて現れたのであつた。

記録を塗り替える

マテソンレンース直後、報道陣の「今一番したいことは何か」の質問に對して、幸吉は「緊張の連続でしたから、今は、ゆっくり眠りたい」と答えたという。このとき、レース前、五十六キロあつた彼の体重が、レース後五十二・五キロと、三・五キロ減つてしまい、マラソンがいかに過酷なスポーツであるかをうかがうことができる。

須高・細谷光体操教諭の指導

力家であつた。体育学校では

しかし、彼を待っていたものは、多くの表彰式とあいさつ回り、国際試合への出場、各種団体、企業の講演会など

のハードスケジュールに見舞われ、ゆっくり休む間もなかつた。

もう走れません

四十一年は、久留米市で幹部候補生教育を受け、日課にしていたマラソンの練習も思うようにいかなかつた。教育修了後、体育学校に戻つて練習中、右足首に激痛を覚えたが、痛みをおさえ、四十二年三月、青梅三十キロに出場した。が、惜敗、二位となつた。その後、持病の腰痛に加え、

六月左足、七月に右足のアキレス腱を切斷し、第三品川病院、河野稔院長執刀のもと、アキレス腱と椎間板ヘルニアの手術を受けて、次のオリンピック、メキシコに懸けて頑張つたのであつた。しかし、暮れから正月四日まで、須賀川で過ごした幸吉は「父上様、母上様、三日とろろ美味しうございました。(中略) 幸吉は、もう疲れ切つて走れません。何卒お許し下さい。(以下略)」と両親、兄姉、甥、姪など家族あてと、上官にあてた、二通の血染めの遺書を残し、四十三年一月八日午前一時、埼玉県朝霞市陸上自衛隊朝霞駐屯地の宿舎で頸動脈を切り、自らの命を断つた。二十七歳であつた。



上北町の田村さんの庵にある「時雨塚」

栗津より松風とどくしぐれ
哉
藤井晋流は、寛保元年（一七四二）、北町密藏院觀音堂境内（現上北町）に、冒頭の俳句と、松尾芭蕉、宝井其角の名を碑に刻み、芭蕉の「時雨忌」にあたる十月十二日に

現在、この地一帯約三十ヶ所は、須賀川市が昭和三十四年、翠ヶ丘公園として都市計画決定を受け、自然を生かした公園として整備を進めており、約八〇%が造成されている。

として、かなりの地位にいたことから察すれば、子供のころから江戸に出て問屋筋に勤めており、それが縁で須賀川の豪商、藤井総右衛門（俳号・川柳）の長女、久須（俳号・霜楠）の婿として迎えられた

このような藤井家に迎えられた晋流は分家として居を構え商いに励んでいたが、彼が三十六歳のとき、妻、久須に先立たれてからは、俳諧の道に没頭して各地の俳人と交

晋流は、宝暦十一年（一七六一）十一月二十五日、江戸の屋敷において永眠、浅草櫻寺に葬られたが、遺髪を十念寺に埋葬して、藤井源右衛門夫妻の墓碑が建てられた。八十二歳であつた。

須賀川の人物史

藤井晋流の建立者

時雨塚を建立して、芭蕉の五
十回忌と晋流の師、其角の供
養を當んだ。

晋流は、延宝八年、上州（群馬県）小泉村、近藤外記の子として生まれた。本名を佐膳（さぜん）通称、太仲（たちちゅう）、源右衛門、俳号を晋流、篠月洞、百柳軒といつた。少年時代の行動を明らかにする資料などはないが、彼が江戸の俳人、其角の門人

藤井家は、甲州武田家の家臣であつたが、主家没落後、各地に移り住んでいた。その後、永住の地として須賀川を定めて町年寄役などを務めていた。元禄十三年（一七〇〇）春、公儀御代官、岡田五右衛門

晋流は常に芭蕉の精神に傾
とであろう。

上梓することなく写本のみ残
された。もしこれらが出版さ
れていたなら晋流も俳諧史上
に大きな足跡を残していたこ
とがわかった。

「上門」一冊などを脱稿したが、
録し「篠月集」四冊、「蕉門」

須賀川の人物史

13

日本銅版画の先駆者

亞歐堂田善

(一七四八) — (一八二二)

AODOO
DENZEN
NO
ISCHIBOEMI
SOEKAGAWA
GAJOEKAI

と読み、大正十年十二月、須賀川雅友会（会長・佐藤亀之助）が田善の菩提寺である北

「訂万国全図」を幕府天文方と共同制作した銅版画の先駆者である。

諏訪町に
生まれる

この、アルファベットは、
オランダ語での表記で「亞歐
堂田善の碑、須賀川雅友会」

定信の命を受けて、わが国最初の銅版画による大画面の「新

田善は、寛延元年（一七四八）、諏訪町農機具商・永田

惣四郎の次男として生まれ、名を善吉といった。

死別した。兄丈吉（画号嵐山狩野派）が家業を継いだが染物業に転職した。善吉も手伝

いの傍ら、兄から絵の手ほどきを受け、絵の上手な子供として評判であった。これを裏

付ける資料として、数年前十
四歳のときに描いた大絵馬が

上小山田の古寺山觀音堂から
発見された。絵馬の裏面に「絵
師 須賀川 水田善吉」とあ

その後、伊勢国（三重県）寂照寺に画僧月巒を訪ね教えを受け、画技を研鑽した田善は、本町の庄屋・安藤辰三郎の依頼で「江戸芝愛宕山図」屏風を描いた。寛政六年（一

松平定信 との出会い

り、画号はないが、すでに画家として活躍していたことが分かる貴重な作品である。

A black and white woodblock print portrait of a seated Japanese man, possibly a samurai. He is dressed in traditional courtly or military attire, including a dark vest over a light-colored robe. A sword (tachi) is visible strapped to his back. The man has a serious expression and is looking slightly to the right. The style is characteristic of Edo-period portraiture. To the right of the figure, there is vertical text in Japanese, and a small square artist's seal is located near the bottom right of the portrait area.

是重要文化財「亞歐堂田善像」、遠藤田一筆



「新訂万国全図」(日本近海)部分 106×186cm

アジアと

ヨーロッパを見

寛政八年（一七九六）、白河藩御用絵師となつた彼は、屋敷を白河会津町に与えられて、名を太仲と改めた。四十九歳のときであつた。

善は、定信からオランダ製の銅版世界地図やヨハン・エリーアス・リーディングの「諸国馬画集」風景画、人物画など、の銅版画を見せられて銅版画

岡が完成するのは十二年後の文化七年（一八一〇）である。その十二年間、彼は、ひたすら銅版画の研究に明け暮れていたことであろう。その傍ら江戸の街をよく歩いていた。それは、

をたたき師弟の縁を結んだのであつたが、性格が合わず破门されたといわれている（儀学者・久保木竹窓文書）。結局田善は、松平定信とその周辺の蘭学者・森島中良、石井恒右衛門らから知識を得、ショーメルの百科辞書などを参考にしながら、彼なりに研究を重ねて技法を習得したといわれている。定信懸案の世界地

まず田善は、技法習得のため、日本における融蝕銅版画の創製者である司馬江漢の門

技法の習得を命ぜられた。それは、亞細亞と歐羅巴を一見できる、日本版世界地図を幕府天文方と制作することであった。このときに、山善は守信から「亞歐堂」の号を賜つたという。

司馬江漢

田善の「目」でしか見ることができなかつた江戸の街の風景と風俗を克明にスケッチしたのが銅版画や油彩画の作品として知られている「江戸シリーズ」約五十図が全国の博物館、美術館、個人に所蔵されている。

江戸シリーズの銅版画のほか、オランダ製の銅版画などを田善なりに模写した銅版画を約二十点がある。

これらの銅版画は「新訂全国図」を制作するためのたたき台としてできただといつても過言ではないだろう。

須賀川に帰つてからの田善
は、石井雨考の依頼で俳書「春
蔭集」の挿絵として「大隈淺

日本最初の世界大地图
「新訂万国全図」

文化七年、田善は、松平定信の長年の懸案であった日本最初の銅版画による世界大地図「新訂万国全図」(一〇六×一八六センチ)を完成させ、定信の期待にこたえたのである。これは、一七一×五四枚ずつ、十六枚の原版を作成し、それを合わせたものであつた。

しかし、この地図の長文の凡例の中には田善の名は記されていない。これは、町人の田善がいかに定信の信頼を得た銅版画家として、超大作を残したにもかかわらず、職人として、甘んじなければならぬ封建制下における身分の平定信はこのとき五十二歳であつた。

帰郷後の田善は、商家など
の依頼による日本画を主として
描き、文政五年（一八二二）
五月七日、七十五歳の生涯を
閉じるまで一介の町絵師として
て絵筆を手にしていたのでも
つた。

挿絵も制作

最初の銅版画五十二図からなる精密な解剖「医範提綱内象」が蘭学界の第一人者で医師・宇山川玄真的依頼で、最も秀でる銅版画「銅版画」が蘭学界の第一人者で医師・宇山川玄真的依頼で、

(永山祐三)

昭和五十一年二月、須賀川市に「亞欧堂田善の銅版画」など百二十五点が、市内諏訪

町の医師太田宏一さんから贈られた。

このコレクションは、太田

須賀川の人物史

⑯

亞欧堂田善コレクションを蒐集

太田 貞 喜 (おおた ていき) (一八七一—一九四五)

貞喜は、明治四年一月二日、安積郡三柏村守屋、農業太田昌貞の二男として生まれた。

十六歳のとき志を立てて上

京、開業医のもとで研さんを積

み、須賀川の旧家藤井家の娘

テツと結婚した。

その後、明治二十六年、諏訪町に居を構え、「太田眼科医

院」の看板を掲げた。当時の

医学は、漢方と西洋医学の過

渡期にあって、人々の公衆衛

生思想も低く、その向上のために医師会の中に特別講話班

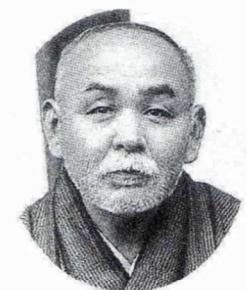
を組織し普及につとめた。ま

た、長年にわたり第一小学校

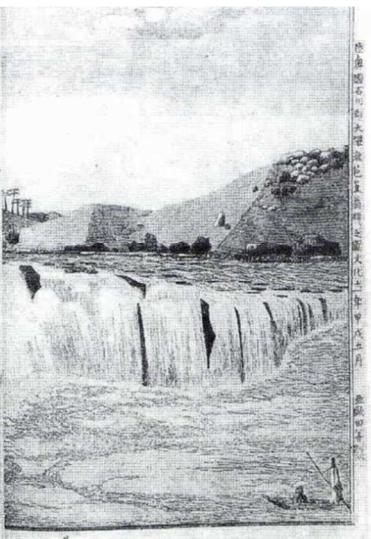
の校医を勤め、学童たちから

は「太田先生」と卒業後も親

しまれていた。



太田貞喜翁



亞欧堂田善作「大隅瀧(乙字ヶ滝)芭蕉翁之図」

ちなみに、明治二十三年から三十九年までの市内の開業医は、岩瀬郡立病院（医師四人）、薄井信太郎、田代広治、太田貞喜だけであった。

ここで「太田貞喜と田善のその後」について述べてみたい。田善については、本紙一月号に掲載したが、明治期に入ると田善の研究も盛んにな

り美術研究家が須賀川を訪れるようになつた。藤岡作太郎、沢村専太郎が美術誌「国萃」に、それぞれ田善の作品について発表して、全国の美術品コレクターなどから注目されるようになつた。特に、南蛮美術品蒐集家として有名な神戸の池長孟などは数回にわたり須賀川に来て田善とその一門の作品を購入している。

これら作品の流出を心配した佐藤龜之助、太田貞喜、矢部楳郎、竹内憲治（現九十八歳）などが中心となつて市外への散逸を防ぎ、田善の顕彰をしようと「須賀川雅友会」を結成した。この中で、貞喜も蒐集に情熱を燃やし質・量ともに屈指のコレクションとなつた。

翁は、昭和二十年二月九日、田善の作品を掛けた自室で永眠したという。七十四歳であった。

福島県では、昭和六一年、「太田貞喜の亞欧堂田善コレクション」を重要文化財に指定。作品は市立博物館に収蔵展示されている。

さんの祖父太田貞喜翁が一生をかけて蒐集した亞欧堂善の作品などである。



首藤保之助氏



首藤保之助著の「泥面の研究」

多くを須賀川市に寄贈した首藤保之助と、主なコレクションについて述べてみたい。

保之助は、明治二十年三月

二十五日、岩瀬郡木之崎村字北作三十三番地（現長沼町）味戸保左衛門の三男として生まれた。二十六年三月、須賀川尋常高等小学校高等科卒業後、東京青山師範学校に学び、四十二年卒業、浅草永住町に住み、済美尋常小学校に奉職した。このころから教え子を連れて、区内や千葉県などに

昭和二十五年一月二十六日の法隆寺金堂の火災で、国は、その年の五月、文化財保護法を制定した。この法律制定以前は、国宝保存法だけで、埋蔵文化財については、何ら保護政策もなく遺跡が農業用地、宅地、工場用地などの大規模開発によつて消滅してもまったくの野放し状態であつた。

この時期、これらの土地から出土した遺物に私財を投じ、克明に記録。五万余点の蒐集をして、考古学上貴重な資料と認められた。晩年その資料の

南は山口県まで遺物の蒐集に奔走した。

現在、これらの遺物は市立博物館に収蔵されているが、失われた遺跡のものとしては、山形県津谷の旧石器、千葉県市川市真間、須和田の土師器などは貴重な資料となつてゐる。特に真間出土の「朱墨二面円硯」は古代の文房具として重要美術品に認定された。

日本の歴史上に旧石器時代の存在を提起した群馬県の相沢忠洋は、昭和二十四年春、岩宿遺跡から発見したボイント（槍先）を、明治大学の芹沢長介教授のもとに持ち込んだが、保之助は、これより二年前の二十二年三月に鏡石町



成田の石切場から出土した旧石器を入手している。これは、後に学会から成田型旧石器と呼ばれるようになった。

二十年十一月、帰郷した彼は、泉村（現玉川村）の屋敷内に、二棟の展示場を建て、「阿武隈考古館」として一般に公開した。その後、三十二年に須賀川市へ寄贈した。その功績によって県文化功労賞を受賞。

四十三年四月二十六日、一生を蒐集にかけて八十一歳の生涯を閉じた。（永山祐三）

須賀川の人物史 ⑯

考古資料の蒐集に奔走した

首藤保之助（しゅとう 保之助）（一八八七—一九六八）

遺物採集に出掛けたといふ。

特に、この時期の蒐集では、江戸時代の子供の遊び道具であつた「泥面」（土で作り素焼にしたメンコ）のコレクションである。この泥面は当時、道路や下水道の工事に伴つて、

江戸時代の遺構が堀り返され、出てきたものを人夫や知人、生徒などの協力によつて、千数百個を収蔵した。しかし、

に遭い、その数も半減したが、震災復興事業によつて多くの数を加えた。昭和五年、一つの区切りとして「泥面の研究」を発刊した。現在、須賀川市立博物館には、約八百個の泥面が収蔵されている。

彼は、教員生活三十六年六ヶ月の間、休日などは専ら遺跡を巡り、それも、関東地方を主にして、北は北海道から、

大正十二年九月一日の大震災

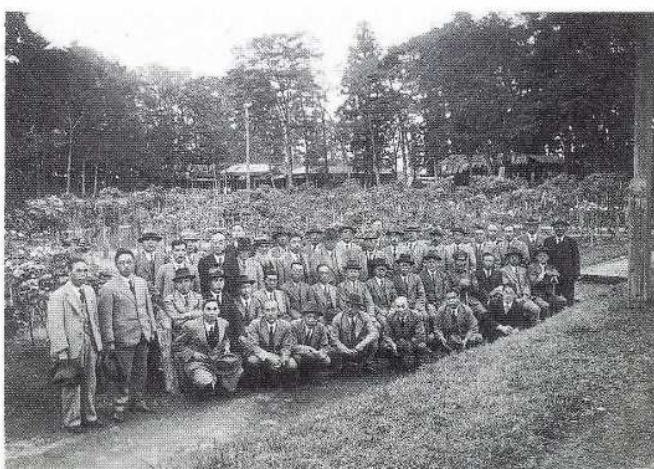


今年も、須賀川観光の一枚看板である国指定文化財、名勝「須賀川の牡丹園」の季節がやってきた。

須賀川の人物史

牡丹園の祖 伊藤佑倫 (ゆうりん)

(17)



昭和初期の須賀川牡丹園



須賀川牡丹園

御薬園を管理

(現兵庫県宝塚市)から導入して、伊藤家の薬草園で栽培し

たのが草創と伝えられている。

祐倫は、享保二十年(一七三五)、道場町(現宮先町)山辺半左衛門の長男として生まれた。が、親戚の薬種商、伊藤八右衛門祐兼に跡継ぎがなかつたので、養子となり、その家業を継いだ。

祐倫は、薬種商と医者とを兼ねて、地域住人の医療にも当たりながら、商売に励み、その商圈は、関東・東北一円に及んでいたといわれている。伊藤家の薬草園(現牡丹園)の地は、阿武隈川の西岸に隣接する台地で、古代には東山道が通つて交通の要所であつたことが、遺跡発掘によつて知ることができる。

昭和十年、牡丹園を訪れた文豪吉川英治は、同行した佐藤直四郎(元マメタイムズ記者)に、「この地は中世のころ、ここを支配していた領主の御薬園跡ではないのですか」と、園内の地形や環境をみていわれたという。このとき英

源頼朝によつて鎌倉幕府が開かれてから、須賀川地方は、二階堂家の所領となつた。この地域は二階堂家の一族で、和田峯ヶ城を居城として、阿武隈川沿岸を支配していた須田家の領地であつた。伊藤家は、二階堂家と同じく、鎌倉幕府から安積郡(郡山市)の支配を任かされた氏族で、大概に城を構えていた。しかし、天正十七年(一五八九)六月、磐梯山麓摺上原の戦いで、伊達政宗に敗れ、須田家を頼つて和田に来たと伝えられている。

伊藤家は、二階堂家と同じく、鎌倉幕府から安積郡(郡山市)の支配を任かされた氏族で、大概に城を構えていた。しかし、天正十七年(一五八九)六月、磐梯山麓摺上原の戦いで、伊達政宗に敗れ、須田家を頼つて和田に来たと伝えられている。

たのではないかと考えられる。

明治の初め、この薬草園を伊藤家から譲り受けた柳沼家

銘文

（昭和六十三年二月号広報すかがわ参照）では、観賞用の「牡丹園」つくりにかかった。

銘文○正面

比地ミカノ原水木村へ十二町

○左 奥州岩瀬郡須賀川

常陸二十八社之内天速玉姫神社

佑倫栽培のほ場が国名勝に



治は、「観る人を見るが牡丹の主かな」の俳句を残している。

二階堂家の御薬園説は、以前から伝えられていたが、この地域は二階堂家よりも、和田に本拠があつた須田家の御



日立市の「大堀神社」前にある伊藤祐倫が建立した道標

薬園ではなかつたか、また、その管理を伊藤家が行つてい

天正十七年十月二十二日の須賀川城落城によつて、須田家は茂木一万石（栃木県）の城主として佐竹家に迎えられた。伊藤家は和田に残り、農民となり、元禄二年（一六八九）、半内祐晴（山辺半兵衛の子）の代に須賀川に出て薬種商となり、屋号を和泉屋とした。このころから薬草の栽培も本格化して、字名も和田

が、祐倫が薬用として栽培した牡丹のほ場をそのまま生かしての整備であつた。これが國の名勝に指定された要因となつた。

牡丹園の字名を牡丹園とした。

柳沼家では明治三十二年、須賀川市に寄付され、財団法人須賀川牡丹園保勝会が管理にあたつてている。

日立に道標を建立

文を祐倫に戻すが、彼は、屋号「和泉屋」にあやかり、茨城県日立市の「泉が森」（茨城県指定史跡）にある「泉神社」を強く崇敬していた。そしてその証として道標を、日立市大みか町六丁目にある大堀神社前の岩城街道（旧国道六号）と泉川道の追分に建てた。この道標は、参拝者や旅人の用に供された。

祐倫も商用で東奔西走の旅に明け暮れ、安永六年（一七七七）七月三日、会津において没し、諏訪町普応寺に葬られた。四十二歳であった。

（永山祐三）

世の人の見付ぬ 花や軒の栗

今から三百年前の元禄二年（一六八九）、俳人松尾芭蕉と弟子の河合曾良は、奥の細道の旅の途中、須賀川の俳人相楽等躬（広報四月号参照）の家に草鞋をぬぎ、八日間滞在した。この間、等躬や市内の俳人と交遊をもつた芭蕉にとって、僧可伸の印象は、

特に深く「おくのほそ道」の中には

「此宿の傍に、大きな栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。（中略）世の人の見付ぬ花や軒の栗」と残している。

芭蕉は、一度可伸庵を訪れ、四月二十四日には同庵で句会を催した。（曾良隨行日記）

一、廿四日 主ノ田植（等躬の家の田植）昼過ヨリ可伸庵ニテ會有。会席、そば切。祐碩賞之。雷雨。暮方止。

須賀川の人物史

可伸庵栗斎（一六〇〇年代）



芭蕉のおもいやす、「おくのほそ道」、
漂白のおもいやす、「おくのほそ道」、
の旅に出た松尾芭蕉と河合曾良の二人は、
元禄二年四月二十二日（陽曆六月九日）須賀川宿に入り、
当時の駅長相楽等躬（通称伊左衛門）宅に草鞋を脱いだ
今から約三百年前のことであつた……。

この句会の出席者は、芭蕉、曾良、等躬、栗斎、等雲（吉田）須躬（内藤）素蘭（矢内）の七吟歌仙一巻の興行であった。このときの歌仙「軒の栗」の発句を芭蕉は、「かくれかやめた、ぬ花を軒の栗」と詠んだが、後に「世の人の見付ぬ花や軒の栗」と推敲して、「おくのほそ道」の中に入れた。

奥の細道の行脚から三百年の歳月を隔てた今日、俳諧史上に語り継がれている僧可伸

の氏素性についての資料などは見当らないようである。



NTT須賀川支店の西側にある軒の栗、可伸庵跡

が、ここで、次の資料などから可伸庵栗斎について考えてみたい。①おくのほそ道曾良隨行日記 ②伊達衣白河風土記 ③栗木庵記 まず、相楽等躬の家は現在の本町三十三番（NTT）にあった。「おくのほそ道」によると、可伸庵は「此宿の傍に」とある。この地は、旧日本派修驗道年行事徳善院の境内地（南北十六間余、東西二十六間余、約四百二十坪）であった。現在は、NTTの一部、本町集会所、市道一五〇二号の敷地となっている。

徳善院は須賀川落城後の慶長五年（一六〇〇）、二階堂家の一族行栄が守屋（現岩瀬村）にあった徳善院の名跡を継ぎ建立した。

相当の素養のあつた俳人？

可伸庵は、この境内に建てられていた隠居所と考えられる。可伸について芭蕉は「世をいとふ僧」「隠栖も心有さまに覚て」と書いているところから、可伸は徳善院の住職を次の代に譲り、隠居の身として、静かに暮らしていたのではないかと考えられる。可伸の、等躬や市内の俳人たちとの付き合い、芭蕉と曾良に対するもてなしかたなどからみると、相当の素養のあつた俳人と思われる。これらのことから可伸は二陸堂行栄の子、もしくは徳善院第二世を継いだ住職ではなかつたか、しかし、このことは想定の上のことであるので、今後確かな資料が現れるのを望み筆を置く。



渡辺光徳作「はせを翁すか川に宿るところ」の図



須賀川の人物史

(19)

銅版画家

渡辺光徳 (一八八七—一九四五)

今年の四月、芭蕉「奥の細道」三百年を記念して、須賀川市が建てた「芭蕉記念館」に、枯淡の境地で描かれた、「はせを翁すか川に宿るところ」

明治二十年 (一八八七) 一月一日、西六丁目四十一番地 (現加治町) 糸柴田屋渡辺幸介の長男として生まれた。

彼は、十五歳のころ、岡部句

童 (広報すかがわ六三年七月号) の指導のもとに俳句を始め、乙夜会の結成に参加。俳号を「拳風、建風、無畏懼」といた。この時期、はぐくまれた俳句の心と仮の教え、特に法華経は、彼の作品に溶け入っていたのを知ることができる。

青年期に入り二十歳のときから二年間、軍隊生活を送り、除隊後、画家としての志を立てたようである。しかし、彼が上京したのはいつであったのか、初期の作品として、大正二年制作の油彩画「長禄寺本堂再建関係者肖像」と「俳人突兀 (高久田金二) 像」があ

る」の図が展示されている。作者は、銅版画家で、近代創作版画運動の担い手の一人として活躍した渡辺光徳である。光徳は、本名を徳一といい、

この突兀は、光徳が上京するときに酒を酌み交わし、記念の俳句をしたためあつたといふ。このことから、想定すれば、彼の上京は、明治末か大正初めではなかつたかと思われる。また上京のことについて、美術雑誌「木星」(大正四年二月号)「中村彝追悼号」

に、光徳は「白骨を前にして」と題して彝の死を悼んでいる。この中で光徳は、「中村君! (中略) 初めて君に会つたのに、光徳は「白骨を前にして」と題して彝の死を悼んでいる。この中で光徳は、「中村君!

は君の谷中の下宿屋生活時代で、広瀬の下宿であったかと思ふ。ちやうど僕は画家の生活に入るべく郷里を出て来た時であつたが、(以下略。注、彝の谷中時代は大正四年七月 (五年八月) と記しており、近代洋画の鬼才、中村彝と光徳との交友を知ることができるものである。

光徳は、上京後、小石川区 (現文京区) 水道端に居住した。銅版画の道に入ったのは、亞欧堂田善の作品に惹かれたためであるといわれている。作品にも丸形小判「亞欧堂田善之像」と美術雑誌「みづゑ」

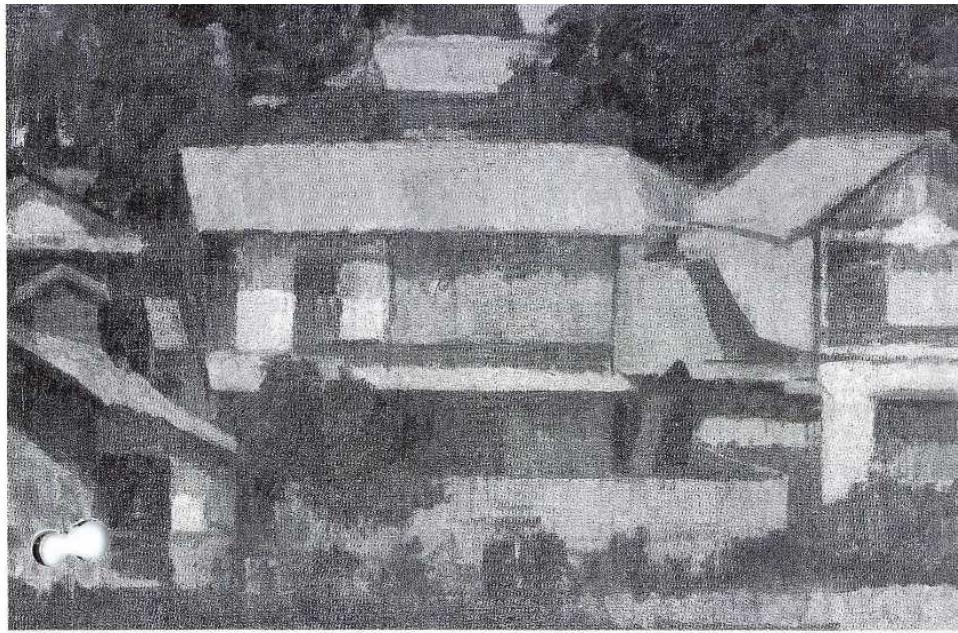
に四か月にわたり論文を連載している。

初期の作品は、二号～三号

ぐらいのものが多く残されている。これらの作品がたたき台となつて、第八回帝展 (昭和二年) に「齋場」を出品、帝展十

回展までの連続四回入選の作品となつて現れたのである。しかし、彼は、制作に使用する薬品によつて呼吸器系の病と潜伏性脚氣におかされ、起きることができず、布団の中で絵を描くこともあつたといふ。昭和十八年太平洋戦争が激しさをまし、光徳夫妻は須賀川に疎開したが、自宅は戦火に遭い、作品など一切が焼失した。晩年は、須賀川町図書館 (館長矢部保太郎) の留守番を兼ねてその一室を仮り住まいとしながら、絵筆を取つていた。が、再起することができず、昭和二十年九月八日、破乱に富んだ一生を終えた。しかし、それは、自分の選んだ道を歩いた一生でもあつた。五十八歳であつた。

光徳が図書館に寄付した三點の銅版画は現在、市立博物館に保管されている。



「須賀川風景」油彩 60.5×72.9cm



嘉吉が独身時代に生活していたという指月園

須賀川の人物史

うずもれていた洋画家

廣瀬嘉吉(一八八七—一九五二)

きち

(20)

広瀬嘉吉は、生存中そして

没後とも須賀川の歴史の中で
はあまり話題にものばらなか
った人物で、県史や市史の中
には氏名すら載ることもなか
つた。

セザンヌの理論を吸収

嘉吉が突然、近代洋画の壇
上に現れたきっかけは、今春
四月八日から五月七日まで福
島県立美術館で行われた「生
誕百年記念 中村彝・中原悌
二郎と友人たち」の、大正時
代を代表する洋画家と彫刻家
の作品による企画展で、二年前
から茨城県立近代美術館、東
京練馬区立美術館、県立美
術館の共同企画で準備が進め
られていた。県立美術館学芸
員の岡部幹彦さんが、収集資
料の整理中に嘉吉の存在を見
い出し、彼の作品について「デ
と前後して、太平洋画会研究

ツサンに優れ、初期の作品に
はセザンヌの理論、造形を十
分に吸収した跡が見られる」
と高く評価している。

嘉吉は、明治二十年十一月
十七日、西五丁目二十七番地
(現加治町) 仕立職広瀬岩太
郎の長男として生まれた。

志をたて、中退して上京。黒田
清輝らが創設した白馬会研究

所に学び、三十九年秋に、中
村彝を知った。また、同研究
所の中原悌二郎、鶴田五郎、
高野正哉らと交友を深め、五

人組と呼ばれていたといわれ
る。

彫刻家荻原守衛の影響を受ける

嘉吉が突然、近代洋画の壇
上に現れたきっかけは、今春
四月八日から五月七日まで福
島県立美術館で行われた「生
誕百年記念 中村彝・中原悌
二郎と友人たち」の、大正時
代を代表する洋画家と彫刻家
の作品による企画展で、二年前
から茨城県立近代美術館、東
京練馬区立美術館、県立美
術館の共同企画で準備が進め
られていた。県立美術館学芸
員の岡部幹彦さんが、収集資
料の整理中に嘉吉の存在を見
い出し、彼の作品について「デ
と前後して、太平洋画会研究

所に移り、中村不折、満田国
四郎の指導を受けながらミケ
ランジェロやロダンの画集な
どによって西洋美術の研究を
しながら、研鑽に励んだという。
四十二年六月には、中村、
中原と共に彫刻家萩原守衛を
訪ねた。このとき萩原から受
けた影響は、特に大きかった
といわれている。この時期、
中原号の「人物史」で紹介し
た渡辺光徳も上京して彼らと
同じ太平洋画会研究所に入り
学んだのであつた。くしくも

嘉吉、彝、光徳は同じ年齢で、
中原は一歳年下であった。
嘉吉は、大正四年から九年
まで須賀川に帰り、指月園(現
大町)の一室で絵筆をとつ
ていたと伝えられている。今
回の展覧会に出品された「須
賀川風景」は、この時に描か
れたものといわれている。

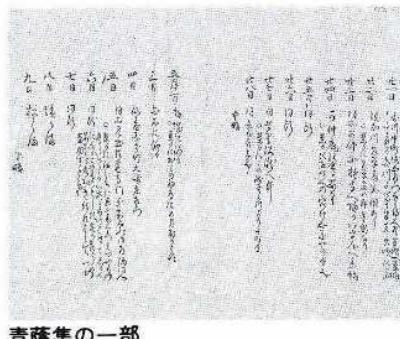
この時期、彼は、白河町中町
の資産家で多くの芸術家の後
援をしていた伊藤隆三郎の援
助を受けていたという。
九年、再び上京した嘉吉は、
日本美術院の彫刻部に通い、勉
強を始めたが、家庭の事情で中
断して、十三年三月、宇都宮に
居を構えた。彝は、次のような

手紙をあてている。「前略)
それはそうと今度宇都宮で展
覧会をやるそうだね。内々に
い、静物が沢山出来てゐるの
ではないか。かくして置かず
にい、のがあつたら是非もつ
て来て見せてくれないか東京
の金塔社の連中はどういふも
のかこの頃すつかり熱を失つ
て皆んな沈滯してゐる。どう
かいつものを二、三枚もつて
来て皆んなの眼をさましてや
つてくれ。(以下略) 納

(永山祐三)

手紙をあてている。「前略)
それはそうと今度宇都宮で展
覧会をやるそうだね。内々に
い、静物が沢山出来てゐるの
ではないか。かくして置かず
にい、のがあつたら是非もつ
て来て見せてくれないか東京
の金塔社の連中はどういふも
のかこの頃すつかり熱を失つ
て皆んな沈滯してゐる。どう
かいつものを二、三枚もつて
来て皆んなの眼をさましてや
つてくれ。(以下略) 納

雨考肖像画



青蔵集の一部

江戸俳諧の希観本として出
版界や俳文学会から注目され
ている「青蔵集」は、百七十
五年前の文化十一年（一八一
四）、諏訪町の酒造業で俳人
の夜話亭雨考が編集、発行し
た俳諧書である。

亞欧堂田善が 挿絵を描く

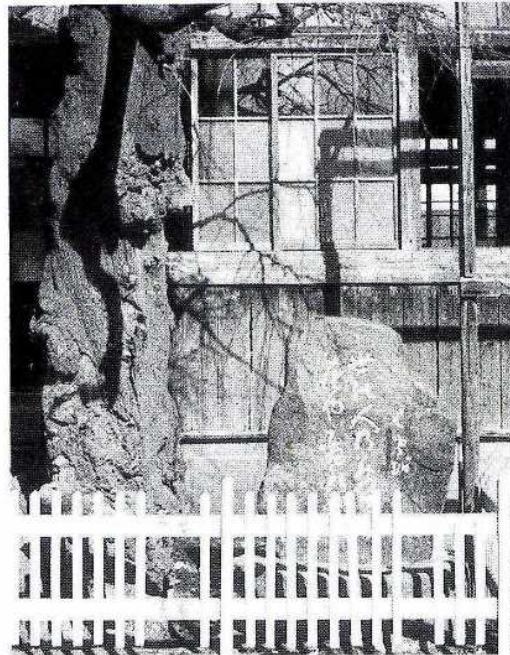
て西洋の銅版といふものに真
景をうつさしめ我辺境に是ら
の風色ある事をする人稀なれ
ばよき序とおもひて世の人には
披露す」。

ちなみに田善は、この時期、
仕えていた白河藩主松平定信
(樂翁)が、家督を嫡子定永に
譲り、隠居していたので、樂翁
から暇をもらい、須賀川に帰
ついた。帰郷後の作品とし
て高く評価されているのが前
の市原多代女が書いた。

青蔵集を編集した 石井雨考（一七四九～一八一七）

須賀川の人物史

②

八幡社境内(現市役所前)に雨考らが建立
した「軒の栗」句碑。現在は可伸庵跡に

この本が各方面から注目さ
れている要因は、挿絵と曾良
の「おくのほそ道隨行日記」
一般には著名で伝統的な各派
の画家か、浮世絵画家に挿絵
を依頼したのであつたが、雨
考は隣家の亞欧堂田善(広報
一月号参照)に銅版画で「陸
奥国石川郡大隈滝芭蕉翁碑之
図」の制作を頼み、彼は同書
に次のように記している。

「前文略)田善翁にあつらへ
彼は、この句碑の建立にあ
やかり、芭蕉崇敬の証として、
青蔵集を編集したのではない
だろうか。また挿絵のほかに、
注目されていたのは、當時ま
だ何にも載せられていないかつ
た曾良の隨行日記の一部で、白
河から松島までの収録である。

曾良の隨行日記は、芭蕉研究家
山本六丁子が発見し、昭和十八
年に出版されたが、それまで
は、貴重な資料であった。

全国の俳人から多くの俳
句が寄せられている。主な俳
人としては、大伴大江丸、井
上士朗、金令道彦、小林一茶、
松窓乙一、建部巣兆などであ
る。跋文は出版元となつた、
江戸浅草藏前札差で、俳人の
夏目成美(一七四八～一八一
六)が書いた。また、道彦、巣
兆と共に、江戸三大家といわ
れていた。成美は、文人画家
としても知られ、雨考との関
係で、市内にも数点の作品が
残っているという。特に、市役
所前にある芭蕉記念館に展示
されている「芭蕉像」は、黒
染めの居士衣を着て扇子を膝
に立てて座る風骨を帶びてい
る画像である。

雨考は、青蔵集の中に芭蕉
の「五月雨」の句を発句とし
て、地元の俳人たちと歌仙を巻
いている。また序文は、弟子
の市原多代女が書いた。

小林一茶も 句を寄せる

それは俳壇における彼女の地位
が確立されつつあることを
認めたからであろう。

のころから、俳句を徳善院の僧二階堂桃祖に学び、二十三歳の時、諷訪の森の傍らに庵を建て、俳人の交遊の場とした。

この庵に桃祖は「夜話亭」と名付けた。また文化七年夏、成美は、夜話亭の周囲の環境

と雨考の人柄から、庵の地を「秀海」として、記念に「秀海の記」を揮毫して贈った。雨考は、俳諧活動の一つとして市内の俳人たちと木版で絵入りの「俳句刷り」を発行した。挿絵は田善の描いたものが現在四点確認されている。

が、特に文化十年に出したものは、十九・五×百四センチの特大判で、俳句刷りとして海の記」を揮毫して贈った。雨考は、あまり類がないものである。田善の「蛻壳りの図」に道彦、多代女、桐宇、旧台、雨考など十二人の俳句を入れ、終わりに「みちのく須賀川連」

が、これは二人が年齢も一歳違いで、仲の良かつた友達であり、後に、両家の子供たちが縁組みをしたためでもあると思われる。

（旧矢部滑郎コレクション現市立博物館蔵）とある。

田善の画に雨考が俳句を贊した幅物も数点残されているが、これは二人が年齢も一歳違いで、仲の良かつた友達であり、後に、両家の子供たちが縁組みをしたためでもあると思われる。

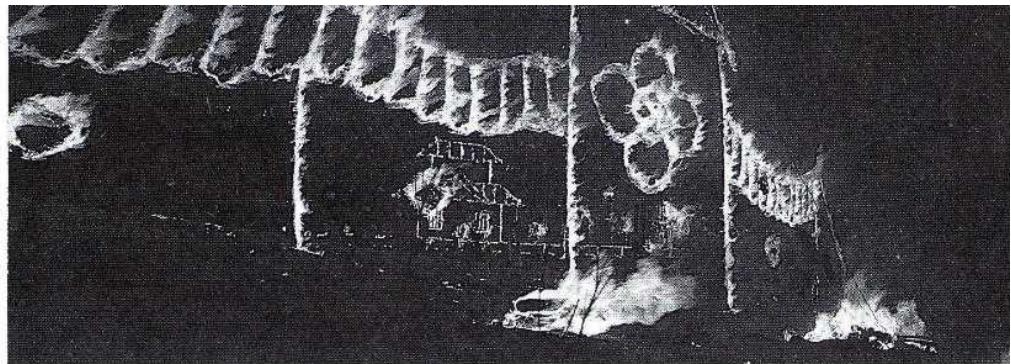
「軒の栗」句碑

雨考は、晩年の文政八年、芭蕉の俳句「世の人のみつけぬ花や軒の栗」の句碑をゆかりの地、八幡社境内の枝垂れ桜の許（現市役所前駐車場）に竹馬、英之、阿堂と共に建立した。しかし、この句碑は三度場所を変えられた数奇な運命をたどり、現在はNTT裏の可伸庵跡に建てられている。このように家業の傍ら、芭蕉を尊敬し、地方俳壇の指導者として一生を送った雨考は、文政十年七月六日、「わが命どの朝顔の露ならむ」の辞世の句を残し七十八歳の生涯を終えた。

須賀川の 人物史

略の犠牲になつた姫
岩瀬御台(二)

須賀川城は、四百年前の戦国時代、天正十七年（一五八九）十月二十六日、米沢の伊達政宗に滅ぼされた。当時の仙道筋は、政宗を頂点として同族同士が血で血を洗う葛藤の世の中であった。そのような中で多くの女性は、ドロドロした渦の中に巻き込まれ、政略の犠牲となつて一生を送つた。その一人に二階堂家の血をひく岩瀬御台がいた。



ムジナ狩りに こと寄せる

松明あかしは、この戦いで
戦死した多くの人々の靈を弔

うため、新しい領主の目をはばかり、ムジナ狩りにこと寄せて、続けられてきた火祭りです。

います。この五老山は、天正九年、三春城主田村清顕方と須賀川城主二際堂盛義の老臣五人が和睦の交渉をしたことから、五老山と呼ばれるようなつた所です。

また、松明あかしに行われ
る姫行列には、悲しい物語が
秘められています。

会津黒川城主の

二女として生まれる

盛隆の後見としてにらみ
を利かしていた盛氏おさだが亡く
なると、盛隆は、男色と酒に
溺れ、天正十二年（一五六

四) 十月六日、三十三歳のとき家臣の大庭三左衛門に斬殺された。

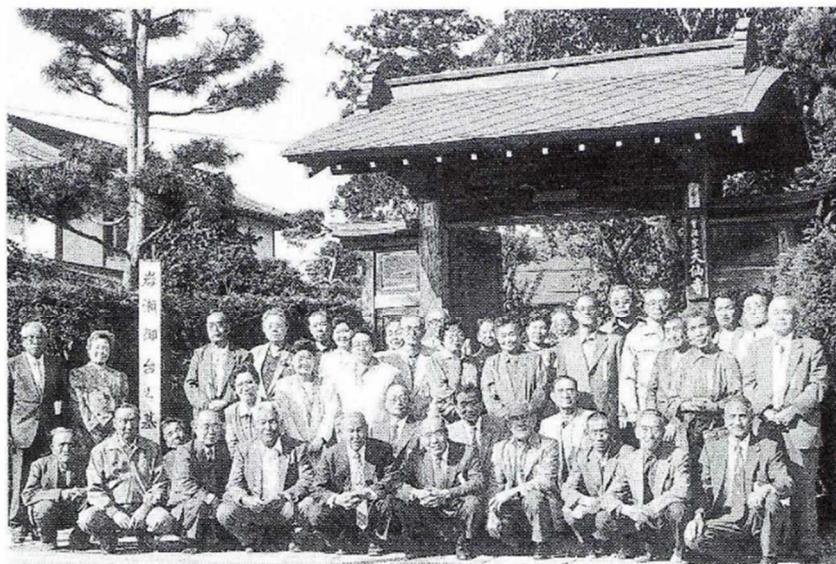
この年、政宗は十八歳で伊達家を相続、仙道筋を我が手中に入れべく企てていた。

九年八月二十六日、盛義が病没。後室の大乗院は尼になり、須賀川城主となつた。

盛隆の二女を養女とした。その後、政宗は政略結婚によつて親戚同士となつた一族に、妥協のない戦いを挑み、須賀川城も落城した。このとき落ちのびて行く身

三千代姫悲話

和田大仏南の岩間城で待ちました。ところが三年たつても城を明け渡さないので、涙を飲んで三千代姫を離縁し、送り返して、治部を討ち入城しようとした。三千代姫を和田から送り返す途中の暮谷沢で、両軍が激しい戦いとなり、三千代姫は進退窮まり、「人間はば岩間の下の涙橋流さでいとま暮谷沢」と、辞世の歌を詠んで自害しました。



須賀川史談会が岩瀬御台の墓参

須賀川史談会員は秋田を訪問し、天仙寺にある岩瀬御台、須田美濃守、須賀川衆の墓参をしました。（昭和63年10月4、5日）

間もなく彼女は、十八歳の若さで離縁された。

彼女は、横手城下の屋敷で余世を送ったが、義宣からの二百石の化粧料と数々の贈り物に愛を感じ、自らの立場をわきまえながら、義宣没後の寛永十六年（一六三九）八月八日、破乱にとんだ生涯を閉じた。五十四歳であった。

二代藩主義隆も彼女へのいたわりを忘れることなく、葬儀は藩によつて執り行われた。

なぜ離別した女にそれだけのことをしなければならなかつたのか、それは佐竹氏が水戸五十四万石から秋田二十万石に減封、国替えとなつたとき、新藩創設の犠牲となつた彼女の藩として最大の栄誉をもつての報いといわれている。

義宣の奥方となつた「岩瀬御台」である。

慶長七年（一六〇二）、佐竹家は、水戸から秋田に国替えしを寄せた。この姫が、佐竹田城（秋田市）に入城して、

る位牌のホゾの部分に「天英様（義宣）の御台なり、わけ

これあり天仙寺において御葬式ありますものなり」と小さな文字で記されている。

「わけこれあり」は、彼女が背負つて来た二階堂、芦名、佐竹、伊達の血のためではなかつたのか、また、義宣は

政宗の背後に見える家康の大きな影におびえていたためであるという。（永山祐三）

いかに戦国の世とはいえ、夫と父の板ばさみの悲しい物語に、昭和三十年、竹内憲治さんによつて暮谷沢の涙橋に碑が建立されました。また、昭和六十三年四月には、三千代姫堂建立実行委員会が三千代姫像を安置するお堂を建立しました。

この編集にあたつては、
村越幸司須賀川史談会長に
お話しを伺いました。

四百年前の天正十七年（一五八九）十月二十六日、仙道

筋と会津街道、岩城街道が交

差する交通の要衝にあつた須賀

川城は、会津一円を我が手

に滅ぼされた。このとき、須賀

川城主は「階堂盛義の後室」大

乗院、四十七歳。また、政宗

は、独眼竜の異名をとる奥州

の暴れ者二十三歳であつた。

この攻防戦は、伯母と甥の

「骨肉相食む」戦いで、大乗院

は戦国時代の女城主として、

今に語り継がれている女傑で

ある。



400年前の伊達政宗との戦いを慰めるかのように燃え盛る松明あかし

また、盛興の後室（晴宗四女、大乗院の妹）二十四歳を盛隆の妻にして、三女を儲けたが、夫婦仲がうまくゆかず、盛隆は、男色と酒に溺れるようになつた。このころ、須賀川城主階堂盛義が病没。後室は尼になり、城主として、領内の安定に努めた。家臣は、その威に服したという。彼女は盛隆の行状をいさめ、彼らの仲もうまく行くようになつて、男子亀王丸が生まれた。

盛義の没後 女城主に

大乗院は、天文十一年（一五四二）のころ、伊達郡西山城（国史跡、桑折町）に居城して、伊達家十五代晴宗の長

女として生まれた。のち、彼女は従兄の「階堂家十八代盛義（盛義の母は晴宗の妹）」に嫁いだ。彼女は盛義との間に盛隆を生んだが、盛義は永禄九年（一五六六）、会津黒川城（若松城）芦名盛氏と争いを起こして敗れ、嫡子盛隆十

六歳が人質として黒川城にとられた。その後、盛氏が隠居して嫡子盛興が家督を継いたが、病弱のため三十九歳で没した。ここで盛氏は人質の盛隆二十歳を跡継ぎにして黒川城主とした。

須賀川の人物史 大乗院

（五四二—一六〇三）
②

伊達政宗の母 伯

その後、盛氏が隠居して嫡子盛興が家督を継いたが、病弱のため三十九歳で没した。



戦国女将大乘院と岩瀬御台を熱演した「宝井琴桜大講談会」。10月14日、市中央公民館

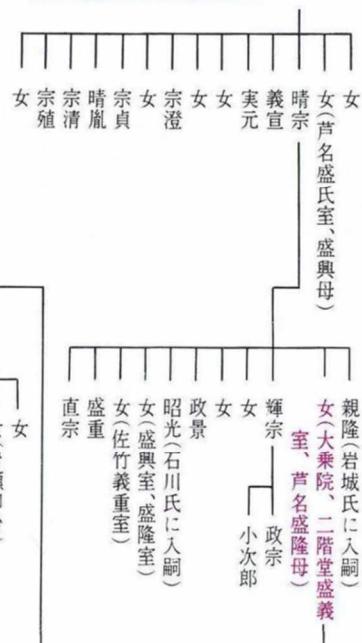
秀吉に芦名討伐の弁明をした。その翌月の十月、須賀川城攻略にかかり、そのとき、須賀川城内には、政宗に内応していた二階堂家の重臣がいたことを裏付ける政宗の書状が、近年発見された。その書状には、城内情況を知らせ、政宗の出馬を促した書状にこたえて、政宗が承知したとの札状である。日付は十月二十一日亥刻（午後十時ごろ）、あて名は「南左近大輔」となつてゐる。この人物は、「保土原左近行藤入道江南斎」ではなかと思われる。ちなみに保

重なり、かわいがつていた孫の亀王丸が疱瘡にかかり、わずか三歳で命を落とした。このとき、芦名家では相続争いが起き、伊達政宗は弟の小次郎を入れようとした。政宗に反発

孫の出生を喜んだのもつかの間、盛隆は、天正十二年（一五八四）十月六日、三十三歳で、籠臣の大庭三左衛門に斬殺して二陸堂、芦名、佐竹連合ができた。それは、政宗が仙道筋の一族に妥協のない戦いを挑んでいたからであつた。

二階堂家四百年の 幕を閉じる

伊達家略系図



り切り、実兄の岩城親隆（平
家）を頼り、のちに妹の嫁ぎ先、佐
竹家（水戸）に身を寄せた。平
慶長七年（一六〇三）、佐竹
家は秋田に国替えが決まり、
彼女もその移封の旅に同行す

い出の地須賀川はとどまり
六月十四日、乳母高橋菊阿
弥の草庵で六十年の生涯を終
え、菩提寺の長禄寺に葬られた。

佐竹家に身を
寄せた後須賀川に

落城後、政宗は新しい館を
建て、大乗院を迎えた。やがて
示したが、彼女は、それを振



天寿をまとうした牡丹を供養する「牡丹焚火」(11月19日)

会津には「木の根^ル明く」という春の季語がある。春になつて木の根の周囲の雪が解けて穴があいたようになることである。会津の俳人が誇らし気^アに説明してくれる会津だけの季語である。いわゆる一流の出版社が出している俳句歳時記

には、この「木の根明く」は当然のように載っていない。俳句歳時記に載つていな
くとも、会津の俳人は春の季語として俳句を作つてい
る。私はそれでいいと思う。その土地の風土が、昔から
慣れ親しんできた言葉（季

須賀川衆を預かる

慶長七年、佐竹家は水戸から久保田（秋田市）に国替えとなり、石高も八十万石から二十万石に減った、これは関ヶ原の戦いで豊臣家に加勢したためであつた。佐竹家と行

盛秀は東部衆を引き連れ
大乗院、矢田野安房守、遠

遺骸は下宿・奥州道わきに埋められ、稚児ヶ塚といわれた。また処刑の場所には農民の手によつて土手が築かれ、用水池となり、稚児ヶ池と名付けら

盛秀は落城後、矢田野秀行と共に水戸・佐竹家を頼り仕えた。佐竹義宣は盛秀に茂木（栃木県）一万石の城主として、その支配を命じた。

広報すかがわ 平成元年12月1日

須賀川の人物史

須賀川城代
須田美濃守
盛秀と天仙丸

みののかみもりひで

てんせんまる

(24)

天正十七年（一五八九）十一月二十六日、須賀川城の最後の一兵が倒れたのは申の下刻（午後五時）ごろであった。伊達家治家記録に「本城が落城した後までも任務を守り戦死すること実に希代の事なりと皆嘆美す」とある。ここに中世の須賀川、岩瀬地方を四百年に及び支配した二階堂

この戦いは、大乗院と政宗」との戦いであったが、二階堂家臣団の戦いでもあった。戦後、多くの家臣たちは、それぞれに身の振りかたを決め、水戸佐竹家、仙台伊達家に仕官して須賀川を離れた。この中で、二階堂家筆頭家老であつた須田美濃守盛秀は、

和田は居城して東部を支配していた。
盛秀は二階堂盛義亡き後、
須賀川城代を勤め、政宗の須
賀川攻めのとき、政宗からの
和順の申し入れを受け入れる
よう大乗院に建言したが、容
れられなかつた。

場を駆けでいたときは、崩れてきた塀に押し倒されたところを伊達勢に取り押さえられた。政宗は戦いが終わって三日後、逆らつた者への見せしめとして、天仙丸を山寺山王山の谷あいに立てた磔柱に縛りつけ、駆り集めた群衆の前で高

れたが、いつのころからか「築後塚」「築後池」と替えられて今に伝えられている。

雅樂頭、水戸・佐竹家、岩城・
岩城家からの援軍と共に城に籠り、伊達勢と戦った。



松明あかしの武者行列で勝ちどきをあげる二階堂侍

動を共にした盛秀は、のちに横手に移り、横手城代を勤めた。秋田に移った二階堂家の家臣団を盛秀が預かり、「横手大番衆」「横手須賀川衆」として今日に続いている。

また盛秀は、長男広秀（天仙丸）の冥福を祈るため、城下に金剛山天仙寺を建立した。この山号、寺号は、須田家の菩提寺であった和田の金剛院と広秀の法名天仙清公大禪定門からつけられた。天仙寺は岩瀬御台と横手須賀川衆の菩提寺である。天仙寺と金剛院はともに長禄寺の末寺である。盛秀は城主として武将として戦国の世を生き抜き、寛永二年（一六三五）八月三十日、九十三歳の生涯を終えた。

（永山祐三）

江戸時代後期から ガラス製造へ

人間は昔から、光を通して輝く物に魅せられていたようである。

奈良時代になると、外国との交易も行わるようになり、ローマや中近東で作られたガラス製品もシルクロードを通じて舶載された。しかし、これらガラス製品は限られた階級の人々の所持品であった。ガラスが輸入されて約一千年の間、日本ではガラス製品は行われることなく舶来品が

珍重されていたのである。

江戸時代後期から末期にかけて先見の明があった藩主たちはガラス製造に着目した。

江戸期のガラスとして一般に知られているものに長崎ガラス、薩摩切子、江戸切子などがあるが、他の藩で作られたガラスは、前記の有名ブランドの陰に隠れて、あまり知ら

れることができなかつた。

松平白河藩主の 産業振興策

この時期、須賀川でも白河藩主松平定信（一七五八—一八二九）の地域産業振興策で

ガラス製造が行われた。

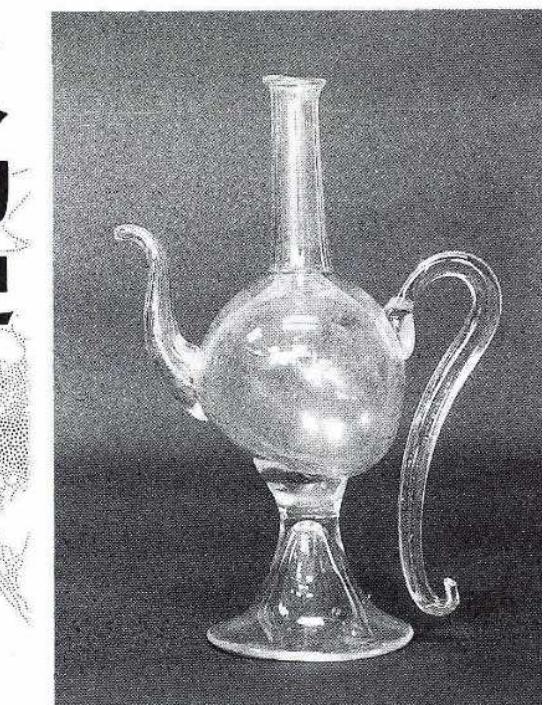
定信は、寛政年間（年数不明）、郷士安藤辰三郎にガラス製造を命じ、長崎からビードロ工人相谷水壺を招請して製造を開始した。定信も寛政十二年（一八〇〇）八月、坂温泉行の日記の中に「今日は須賀川へゆきて（中略）玉

須賀川の人物史 安藤辰三郎

（？）一八一八

板製するを見」とあり、藩としても援助していたと思われる。ガラス工場は安藤家の屋敷内（現加治町）に建てて明治十年代まで約九十年間位製造していたようである。

製品はいろいろの形のものが作られた。水差し、脚付杯、風鈴、小鉢、茶碗などが現存している。また古文書の中には、クナシリ、エトロフなどの探検家、近藤重蔵からの書



水差し。創業のころのものと思われる。比重三・九四、鉛の含有量は五〇%に近い

少ない淡黄色製品 不純物や気泡の

須賀川ガラスとして現在確認されているものは、十点足らずであるが、これらガラス製品はサントリー美術館学芸

記にも「ガラス燈籠三本出来年には明治天皇東北御巡行の日世南山古梁禪師からは、硝子磬子のことを記した書簡が伝えられている。また、明治九年に明治天皇東北御巡行の日には硝子印。仙台瑞鳳寺十五世南山古梁禪師からは、硝子磬子のことを記した書簡が伝

先祖は

二階堂家の家臣

辰三郎は、二階堂家の家臣であつた安藤十郎太夫を先祖にもち、代々町役人を勤め、文八代重憲の長男として生まれた（生年月日は不明）。彼も

定信が領内巡視のため須賀川に来て休憩したとき、田善の「江戸芝愛宕山岡」屏風を目にとめたのも辰三郎の家であつた。ここから亞欧堂田善が生まれたといつても過言ではないだろう。彼もまた舊臺と号し、石井雨考と共に俳句を作り、青蔭集などにも入集している。このように産業、文化、教育と各方面に尽力して文政十一年（一八二八）九月一日没し、長禄寺に葬られた。

（永山祐三）



水野仙子

この間、仙子の作品は数多く文芸誌に発表されたが、単行本としての発行はなかつたので、夫の川浪道三（歌人、作家）は、彼女の作品の中から二十二編を選び、妻へのはなむけとして「水野仙子集」を刊行した。

この間、仙子の作品は数多く文芸誌に発表されたが、単行本としての発行はなかつたので、夫の川浪道三（歌人、作家）は、彼女の作品の中から二十二編を選び、妻へのはなむけとして「水野仙子集」を刊行した。

夫川浪道三が仙子集を発刊

須賀川の人物史

自然主義を代表する文流作家
水野仙子

26



明治四十二年（一九〇九）、二十二歳の水野仙子（本名服部テイ）は、文章世界に推薦で小説「徒勞」を発表し、将来を嘱望されて文壇の人とな

つた。四月に上京。自然主義作家として活躍していた田山花袋の内弟子となつて執筆生活に入る。「写実的作品で人生観照の高い境地を示した作品」を次々と発表。作家として地位を築きあげていたが、大正五年、二十九歳のとき、肋膜炎にかかり、その後、腎臓炎、

腹膜炎を併発、闘病生活を送りながら執筆活動を続けていたが、「醉ひたる商人」を絶筆として、大正八年（一九一九）五月三十一日、脳膜炎を併発し、姉の服部ケサ（広報六年三月号人物史）に看取られながら、群馬県草津温泉「聖バルナバ医院」で、この世を去つた。三十一歳であつた。

つた。

五月三十一日、脳膜炎を併発し、姉の服部ケサ（広報六年三月号人物史）に看取られながら、群馬県草津温泉「聖バルナバ医院」で、この世を去つた。三十一歳であつた。

近代洋画の巨匠 岸田劉生が装丁

道三は、刊行にあたり、序文を師の田山花袋に、装丁を近代洋画の巨匠、岸田劉生に依頼した。劉生の日記の中に仙子集のことについて、次のように記してある。

大正九年三月二十三日（火）晴

川浪道三会場に来り故水野仙子集表紙をたのむ。故人に好意あり快く承知す（註）新橋逸荘、劉生個展会場

五月一日（土）雨

約束の水野仙子集の表紙かく。古い渋い単純な黒と赤の味でうまく行く。先日表慶館で見た素描単彩の味を参考にした。（註）醍醐寺宝物展

伊上凡骨が水野仙子集その五月八日（土）晴後雨



水野仙子(本名・服部泰イ) 小説家。兄の躬治は歌人、姉のケサはライ患者に一生を捧げた女医として有名。

他の表紙刷見本持つて来る。色は少しこないが皆よく出来てゐる。

とある。このようなことから察すると、劉生と仙子は、芸術上の交流で互いに作品を見つめ合い、劉生も仙子の作品を本物と認めていたから、装丁を快く受けたものと思われる。(表紙絵はカット参考照、裏表紙には「水仙」の花が描かれている)

田山花袋 が 序文を寄せた

また、師の田山花袋は「お貞さんの集の前に」と題して序文を寄せている。

その中に「お貞さんの生まれた須賀川といふところは、

昔からあたりにきこえた商人町で、郡山や白河や、二本松

に比べて、何方かと言へば、士魂商才のその商才の方に属する気分の漲つた町であった。

従つて、お貞さんには、士族の娘といふところはなかつた。

何うしても堅い田舎の商家の娘であつた。それに、何処をさがしても浮華なところ、軽薄なところがなかつた。全身

すべて是れ誠とふやうな人であつた」と、仙子と当時の須賀川人の氣概などを述べている。

水野仙子は、本名服部泰イといい、明治二十一年(一八八八)十二月三日、東四丁目四番地(現本町)の商家ラン

プ釜屋、服部直太郎の三女として生まれた。

十八歳のとき、須賀川裁縫専修学校卒業。その後、裁縫塾に通う傍ら、文学についての研さんを積み、女子文壇、文章世界などに投稿、雅号を

水野仙子とした。

大正四年九月、読売新聞記者となるが、五年五月、彼女も肋膜炎を発病。養療生活を続けたが、運命をどうすることができなかつた。

二十二歳のとき、彼女は、前述の「徒勞」の発表によつて上京。田山花袋の門人となつて文筆活動に入った。その後、「お波」「娘」などで作家的地位を築いた。

碑には「川浪道三妻貞子之墓」と刻まれている。

(永山祐三)

墨 こん あざやかな

氣品のある筆さばき

今から八百年前の平安時代、王朝文化の栄華を道の奥の地に去る。
東口直子著

その参道に建てられている標柱の文字は、碑面に空間を余すところなく金色堂にふさわしい人を引き付ける筆致である。この標柱は、加治町妙林寺の住職であった張堂寂俊（号龍禪子、大龍）が大正十二年（一九三三）、東北地方巡錫のとき、中尊寺から請われて揮毫したという。現在の標柱は

石製であるが、元の標柱は木製で墨こんあざやかな上に気品をただよわせていた。

昭和四十三年五月、金色堂は昭和の大修理が完成し創建時の莊嚴さを再現した。このとき標柱の建替えが計画され、当時の中尊寺貢首、今春聴（ペ

の骨折りと中尊寺の好意によつて、自坊の妙林寺に里帰りし、境内の弁天堂に保管されている。

「筆禪一致」を提唱

「ネーム、東光」師は、龍禅子の墨跡を惜しみ石柱に再刻する決定をしたといわれる。龍禅子の墨跡は、金色堂とともに、後世に伝えられるものと思われる。碑の裏面に「須賀川市妙林寺六十八世張堂寂俊師揮毫」と刻まれている。また、四十数年の間、風雪に耐えていた標柱は、関係有志

寂俊は、明治九年（一八七六）三月八日、伊達郡飯野村大字飯野字町七十八番地張堂慶山の長男として生まれた。張堂家は、東聖山五大院といふ本山派修驗聖護院に属する中世から続いた家柄である。彼は、幼名を俊磨といい、書の上手な子供として評判で

坂寂栄のもとで得度した。この後、天台宗中学校から天台宗大学東京分校に入学。僧侶としての勉学を修め、三十一年九月、二十三歳で妙林寺六十八世の住職となつた。さらには研鑽を積むため、天台宗の本山比叡山に登り、「顯密禪戒」の奥義を会得したが、禪については京都妙心寺（臨済宗）にては京都妙心寺（臨済宗）

禪子と号して全国を巡錫しながら研鑽を積み、「筆禪一致」の書法を提唱した。その門弟は一万人とも言われている。

書のほかにも
自画贊の達磨なども
だるま



魚田繁谷画「大薦像」



あつたという。十歳のとき、一日掛りで観音像を描き、母に見せたところ、母は画像に手を合わせ、彼の大成を願つたと伝えられている。

また、彼の本命である書道の師は以前から慕っていた、入木道正統勅賜筆道本源四十世横井北泉である。北泉が岐阜の誓願寺に立ち寄ったときに駆けつけ、入木道に入門を許された。

三十一歳の十二月三十一日、入木道の秘中の秘とされてい
る「鎮火水龍」などの奥義を伝えられ、入木道第四十六世を
継承した。このときから龍

菜根、龍、達磨などがある。特に達磨は東京在住時、愛統閣で描いた百図百態がある。この作品は新宿三越で展観され、須賀川にも数点伝えられている。



大平12年に、大龍が揮毫した平泉中尊寺金色堂の標柱

太宰府觀世音寺の 寺号碑も揮毫

市内妙見山須賀神社わきに
自然石の大碑があり、「靈光」
と刻まれている。この書を揮
毫したときには、筆の先から
光が発したといわれている。

の色を看むか 観世音寺はただ鐘
声を聴くきこ 菅原道真の詩で有
名な九州太宰府觀世音寺の寺
号碑も彼の揮毫である。ちなみ
に、彼の妻リヤウは福岡市
の出身である。

このように各地に墨跡を残
した大龍は、東京の空襲も激
しくなった昭和二十年三月、
北町の寓居で七十一歳の生
涯を閉じた。

（永山祐三）

疎開準備をしていた貨車三両

分の三十余年間の作品、提唱
の原稿や荷物などを全部焼き
尽くし、体だけの帰山となっ
た。帰山後も筆を持ち続けた
が、戦災で受けた精神的疲労

から、昭和二十二年（一九四
七）十月二十日、東九丁目（上

須賀川の人物史

関下人形座育ての親
豊竹姫太夫

(28)
八八



昭和53年県の重要民俗文化財に指定。人形の一部は、市立博物館に展示されています

江戸時代、安永年間（一七七〇）から大正時代（一九三〇）までの約百五十年間、市内関下では、操人形結城座を組織して近郷の祭礼や農閑期の娯楽として、ほかの村を興業して回り、人々から「関人形」と呼ばれて親しまれていた。が、大正十一、三年ころの西袋村山寺山王様（日枝神社）の秋祭りでの上演を最後に、一座の幕を降ろしたといわれている。

それから四十年後の昭和三十九年一月、関下地蔵堂境内の郷倉（備荒米倉庫）と、最後まで人形芝居の座長として、区の人たちを指導していた根本伴右エ門の孫、正忠家の土蔵から、数多くの操人形と闕をねん出するため、最後の

江戸から大正時代にかけて150年続く

江戸時代、安永年間（一七七〇）から大正時代（一九三〇）までの約百五十年間、市内関下では、操人形結城座を組織して近郷の祭礼や農閑期の娯楽として、ほかの村を興業して回り、人々から「関人形」と呼ばれて親しまれていた。が、大正十一、三年ころの西袋村山寺山王様（日枝神社）の秋祭りでの上演を最後に、一座の幕を降ろしたといわれている。

ドサ回り一座の興業が庶民の楽しみ

江戸時代の地方の町には、常設の芝居小屋（劇場）などはなく、一年に一回か二回、巡業でやつてくるドサ回りの一座を楽しみに待っていた。

豊竹姫太夫（豊竹は義太夫の太夫の家名）は、大阪道頓堀にあつた豊竹座（人形芝居）の一門で、義太夫語り（淨瑠璃）であったという。地方巡業で関下を訪れ、関下の一座の人々に大阪系の新しいカラクリの操作方法や淨瑠璃を指導。部落の人たちとも親しくなり、彼は地蔵堂を仮住ま

係資料が発見された。これらの資料は、早稲田大学教授杉野橋太郎、人形芝居研究家斎藤清二郎先生らの研究家斎藤清二郎先生らの長年にわたる調査の結果、関下人形は質、量ともに全国屈指の資料であることが明らかになった。

なぜ関下に人形芝居が定着したのであろうか？ 江戸時代の関下は、長沼藩領三万石のうち、仁井田村二千七百八十四石余り（天保郷帳）の、金喰川（滑川）の河岸段丘に開けた小さな集落であった。地名は金喰川の「堰」に由来する。

姫太夫は人形の指導で関下に

関下に最初に入った人形類は、古淨瑠璃（一人遣人形）から近松門左衛門の新しい淨瑠璃（三人遣人形）に移行した過度期の江戸系（東京）の古型首であった。その後、文化・文政年間に大阪系（文楽系）の人形類が導入された。この人形類と一緒に、豊竹姫太夫が指導のために来たといふ。

興業地で人形一式を抵当に、金を工面したといわれている。関下に人形芝居が移入されたのも、このようなことからであつたろうといわれている。

いして居残り、人形芝居の普及に心血を注ぎ、生まれ故郷に帰ることなく、閑下の土に骨をうずめた。

「清山淨心庵主

丹波国出生 豊竹姫太夫

文政十一年五月二十二日

が、地蔵堂裏の墓地に建てられた。

総勢20人で

人形座を組織

姫太夫亡きあと、一座の維

と、刻まれた卵塔型の石塔

持と振興には、村を挙げて協力したことが、記録によつて知ることができる。また、世話人も、大世話、中世話、若者連と組織化されて、経済的

など総員二十人ぐらゐの構成であった。

座長として運営に当たつて

いた人々に、農業の傍ら染屋

吉田幸三郎、一八四七—一九

一九) 根本伴右工門(芸名吉

田冠三、一八三八—一九一二)

根本寅蔵(芸名吉川虎吉、一八七二—一九三五)などがいる。

七二—一九三五)などがある。

一本松や大信村まで

巡業に出かける

外題帳や興行収入帳から興行地の一部を記してみると、

前田川、石川町、舟津、大里、長沼町、岳下村(現一本松市)、大屋村(現大信村)などとなつてゐる。明治四十年ころの一人当たりの日当は、三十銭から六十銭ぐらゐであつた。

山寺山王様の祭りで

幕を閉じる

大正期に入つて新しい時代の流れは、急速に東北の地にも押しよせた。閑下人形結城座は、約百五十年間、県内各地を興行し、土地の人々に、人情と娯楽で接してきたが、一座の老齢化や後継者の問題、そして、新しい時代の流れには勝てず、前記の山寺山王様の祭りを最後に一座の幕を降したという。

本名は角田源寿

石川町に生まれる

昭和三十年代の国指定名勝「須賀川の牡丹園」のポスターに、大輪の牡丹の花を的確な描線と華麗な色彩で描き、人々の目を引き付けていた作品があった。この作者は、写



磐谷が描いた牡丹園ポスター

昭和30年代に4点の作品がポスターになった。全国の駅などに掲示され、評判を呼んだ。

須賀川の人物史

牡丹に魅せられた画家
角田 舟谷

(29)

磐谷は、本名を源寿とい、明治二十二年（一八八九）五月五日、石川郡中谷村（現石

丹の磐谷」といわれ、牡丹園の名勝指定に尽力した日本画家角田磐谷である。

川町）大字谷沢字北ノ前七十
六番地、角田豊之助の二男として生まれた。

彼は、子供のころから絵を描くことが好きで、石川町尋常高等小学校を卒業と同時に福島市の画家長尾月仙の内弟子となつた。が、画家としての勉強は、中央画壇のなかでなければならないと志を立てて上京。日本画の大御所高森とき、碎巖は寺崎廣業の天籟画塾への入門をすすめた。

大正九年二月、廣業が没し、彼は、その後、師を求めることなく制作に励み、郷里石川の山中を題材にした「春の若木」が帝展に初入選。その後、帝展五回、文展二回に入選した。この間、何回か特選候補に上がつたが、師匠につかないと、一匹狼であつたため、選ば

廣業のもとで三年間修業を積み、「王摩結」を天籟画塾展に出品して初めて世に問うた。この時期の作品には廣業の影響が強く出ているといわれている。



60歳のころの角田磐谷

福陽美術会の第3代幹事長

昭和十六年から十七年の戦時下、磐谷は陸軍省嘱託・從軍画家として、関東軍に派遣され、満州（現中国）各地を写生して、陸軍省に「ソ満国境図」などを納めた。

帰国後、この絵と同じ図柄の「ソ満国境図」を福陽会第十四回美術展に出品した。

れることがなかつたといわれている。しかし、昭和二十四年、彼の業績が認められ、日展委員に推薦された。

福陽美術会は、大正八年四月八日、福島県出身の在京日本画家で結成した組織で、幹部には勝田蕉琴（会長）、荻生天泉（幹事長）、酒井二良、角田磐谷、坂内青嵐などがいた。磐谷は青嵐のあと三代めの幹事長を務めた。須賀川出身の会員は、須田善二（珙中）と渡辺武久（太子庵）がいた。

現在この会は、大山忠作（二本松市出身）が代表幹事となつて運営にあたつている。

隣家から出火で すべての作品を焼失

昭和九年九月三日、磐谷は大きな災難に見舞われた。それは、結婚してから十八年間住んでいた、駒込林町の自宅が、隣家の失火で類焼し、画家としての財産である貴重なスケッチブックや各種の展覧会に出品した作品がことごとく失われた。

「屋後展望」が 第15回帝展に入選

この年、不幸にめげず、第十五回帝展出品の制作に励み、軍鶏を題材にした「屋後展望」

が入選した。

「屋後展望」は現在、福島県立美術館に収蔵されている。

同館には、磐谷が県内の名所旧跡などを描いた二十三点の作品がある。



「屋後展望」(182cm×193cm、昭和9年制作)

和田字柏崎に アトリエを建てる

二十年三月、東京の空襲も激しくなり、彼は家族とともに石川町に疎開した。終戦後の復興が始まり、世の中に活気が見られるようになつた二十一年五月、牡丹園に近い浜田村和田字後町に移り、牡丹の写生に没頭した。その後、三十一年一月、和田字柏崎に居を構え、制作の傍ら、県内の日本画家たちを指導した。

昭和39年県文化 功労賞を受ける

磐谷は、三十九年十一月三

日、画家としての業績と美術界に尽くした功績により、福島県文化功労賞を受賞した。受賞を記念して「画業五十年回顧自選展」を福島市中合デパートで開催。格調の高さと筆致は観覧者を驚かしたといふ。その後も絵筆を持ち続けたが、四十五年(一九七〇)四月七日、和田字柏崎四十番地の自宅で八十一歳の生涯を閉じた。

磐谷の作品の代表作といわれる、帝展、文展の出品画の多くは、政府買い上げとなり、各省庁に保管、展示されている。が、戦火と自宅の火災で失われ、現在は、画集や写真でしか見ることができない。市の施設では市立博物館と芭蕉記念館に展示してある。

(永山祐三)

24
歳
で

須賀川の生産方に

市役所正門の左側に根回り
約三尺七十センチのアカシアの老
木がある。ここに小学校があ
つたころは、夏の暑い日に、
児童や近所の人が木陰で涼を
とつていた。

期、生産方として須賀川の発展に尽くした橋本傳右工門が植えたものである。彼の覚え書「老のくり言」（アカシヤ樹ノ繁殖）の中、「当町学校へ献木セリ」とある。生産方とは、明治二年（一八六九）、明治政府の新政策として打ち出した勧業行政の組織で、資金として太政官紙幣（金札）が貸し付けられた。

取締役所の管轄にあって、次の六人が元締（役員）として任命された。竹内庄三郎（四十歳）、橋本彦作（傳右工門二十四歳）、石井勝右衛門（三十四歳）、柳沼新兵衛（四十五歳）、塩田治助（四十歳）、柳沼大助（年齢不明）。傳右工門は二十四歳の一番年下であった。

からは、一般行政事務まで担当させられ、許認可事務まで取り扱つた。事務所は、中町旧白河藩陣屋（今の東邦銀行裏）跡に置かれた。三年八月に、生産方は廃止され、「生産会社（物産方）」と組織変え、して役員は十一人となつた。傳右工門は弘化二年（一八

生産会社は、その年に役員の更迭を行い、頭取に市原又次郎（二十六歳）、頭取並に傳右工門（二十歳）が就任し、他の役員の年齢も二十四歳から四十二歳と若くなり、活潑に動き出した。

須賀川の人物史

近代須賀川の礎を築いた

30

門（一八四五）—九〇一



當時、須賀川の支配は、守山藩から「平・民政局」に移り、二年九月に「須賀川県」が設置されたが、十月に廢県となり、白河県の支配となつた。

中町、十一屋の
長男として生まれる

民政局の出先機関になつて



市役所正面入口左側の針棲(はりえんじゅ)の木

當時、須賀川の支配は、守山藩から「平・民政局」に移り、二年九月に「須賀川県」が設置されたが、十月に廢県となり、白河県の支配となつた。

明治三年八月、生産会社設立、公選投票で頭取に市原朔右衛門、元締に橋本傳右衛門、柳沼新兵衛、柳沼大助、元締並に石井勝右衛門、塩田治右衛門、高久田金三郎、肝煎に道山三次郎、永田藤藏、永田佐吉が選ばれた。翌四年の公選では傳右衛門が頭取並に選ばれた。

や太物縮麻の太い糸の織物を商つていたといわれている。彼は記録によると、明治二年までは名を彦作と称しておられ、三年から傳右工門と改名したようである。

橋本傳右門は弘化二年（一八四五）二月十一日、中町（今の中町三十三番地）十一屋、橋本傳五右門の長男として生まれた。

立岩瀬病院」六年、商法会所
七年、「産馬会社」「製糸場」などを設置した。また農業に関しては、西洋農法の研究と導入、荒れ地の開拓を盛んにす
るよう奨励した。

彼もまた、和田原（緑町）に十七町歩（約6.5ha）の荒野を購入し、外国から輸入した馬耕具で開墾した。ここに横浜から持ち帰ったフランス産馬（馬車）と鉢輪（馬車）五個を種芋として栽培

緑町17タルを
舶来馬耕具で開

県立須賀川病院

した。土地に適していたため
か、多くの収穫があり、のち

に宮城、山形県南部まで普及
したという。

冒頭のアカシアは、十年、
東京から五本の苗木（一本二十
五銭）を購入して植えたも
のであるが、この木は本当の
アカシア（常緑高木）ではな
く、針槐（ハニセアカシア落葉
高木）であった。これは薪炭
材に適していたので導入した
という。

田善の銅版画を 宮内省に献納

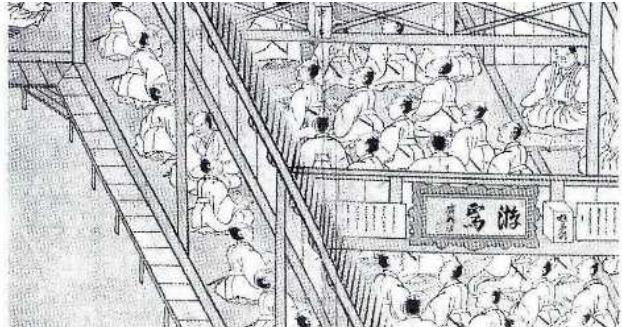
「老のくり言（骨董遊）」の
中に「永年ノ事業ニ失敗シ老
後樂ミニ書画骨董古瀬戸ヲ集
ム（以下略）とある。彼は、
三十二年七月二十四日、收集
品の中から亞欧堂田善の銅版

画四十四点、銅原版一点、木
版一点の四十六点を宮内省に
献納した。現在は東京国立博
物館に収蔵されている。今年
四月二十一日から六月十日ま
で福島県立博物館で開催され
ている「亞欧堂田善とその系
譜」展に彼が献納した中か
ら六点の作品と、かつ所蔵し
ていた油彩画「墨堤觀桜図」
写生帖、「天趣自得説」などが

展示されている。また市立博
物館蔵の県重文「六郡絵図」
も収集品の一つであつた。
このように、産業、福祉、
文化と各方面に足跡を残した
傳右エ門は晩年、岩間三十七
番地（緑町）に移り、明治三
十四年（一九〇二）九月十日、
その生涯を終えた。五十六歳
であつた。

（永山祐三）

須賀川の故郷に示す
多年落魄風塵を逐ふ
璞玉沽らず幾許の春



昌平學門所

この詩は、のちに湯島学門所（幕府の学校昌平學）の教授となつた漢学者白井北窓が

二十七歳のとき、我が國への
外國からの侵入を心配して、
自身蝦夷（北海道）に渡り、
北方の事情を視察しての帰り
に、郷里須賀川に立ち寄った

一）、北町（現七八番地）、
白井八郎右エ門の長男として
生まれた。幼名・佐一郎、名
を篤治といつた。

家業は定かではないが、彼

須賀川の人物史

③

昌平學で勤王志士を育てた
白井北窓（一八二一～一八七七）

北窓は、文政四年（一八二

が明治二年に出版した「養蚕

新書」の序文に、余も亦岩城

須賀川の人也素より蚕事に精

し」とあることから養蚕関係

の仕事をしていたのではない

かと思われる。

町人の子、北窓がどうして

夷論を交わし、近代日本の礎

となつたのか、それは彼の家

柄と子供のころの環境にあつ

たと思われる。

白井家の先祖は、須賀川城

主二階堂家の分家で、二

階堂家の守護神鎌足神社（中

宿）の祭主を代々勤めていた。

江戸時代、北町に移つてか

らは鎌足神社祭礼の神輿渡御

いたという。

十五歳のとき、父八郎右エ

門が他界。彼は志を立てて上

京し、朱子学派の儒者松崎廉

堂（一七七一～一八四四）の

門を叩いた。その後、二本松

藩出身の昌平學教授安積良齋

（一七九一～一八六〇）に師

事。経書（四書五経の類）と

漢詩について学んだ。

彼はまた国事について大志

を抱き、前記の蝦夷地視察後、

外國からの侵入に対しての海

防策をたびたび幕府に進言し

たという。このような動きの

中で、彼は、同志の清川八郎、

安積五郎などと共謀して横浜

港に停泊中の外國船焼き打ち

を企てた。が、事前に発覚し

十五にして家を出て三十にして返れば
故郷の人異郷の人には似たり

ときに受けた情景である。

先祖は須賀川城主

二階堂家の分家

北窓は、文政四年（一八二

が明治二年に出版した「養蚕

新書」の序文に、余も亦岩城

須賀川の人也素より蚕事に精

し」とあることから養蚕関係

の仕事をしていたのではない

かと思われる。

柳蔭について漢詩などの教え

を受けていたのではないかと

思われる。

柳蔭

て未遂に終わった。事件に加わった者で捕えられた者もいたが、北窓は幸い免れることができたという。

伝えられている。

明治十年二月に、西郷隆盛（一八二七～七七）が起こした西南の役では、鹿児島出身の日新堂の塾生は故国存亡のときとして郷里に帰り、また

湯島学門所の教授には42歳で

文久三年（一八六三）、四十二歳のとき、湯島学門所の教授に迎えられた。その翌年、甲府（山梨県）徴典館の学頭に任命された。が、まもなく王政復古（慶応三年・一八六七）で江戸に戻り、小石川に私塾日新堂を開いた。塾生の中には、会津や鹿児島出身の者も多々、百人を超したという。

彼は生前火葬を嫌っていたので、遺骸は、そのまま浅草、智光院に葬られた。明治十二年二月、子弟、知人によって功德碑が浅草高原町（現寿二丁目）金龍寺に建てられた。

知人・子弟によつて金龍寺に功德碑が

水戸・徳川斎昭の知遇を得る

北窓は、水戸烈公徳川斎昭（一八〇〇～六〇）の知遇を得て、小石川の屋敷に招かれ、たびたび酒席と共にして、かなりの酒豪であったという。將軍徳川慶喜（一八三七～九一三）に謁見したときも、酩酊した状態で、相対したと

（永山祐三）

三島中州が選文して、高橋泥舟が書いた。また裏面には、中村正直が人物評を書いたが、この碑は、大正十二年の関東大震災に遭い、現存していないが碑文の写しが残ったことは不幸中の幸いであった。

寛政四年、谷文晁が白河藩御用
絵師として招聘されてからは、
白雲の画も文晁が取り入れた
洋風画の遠近法と高遠法によ
つて描かれた。この技法は、
のちに集古十種の資料収集の
傍ら、各地の風景などを写生
したときに生かされている。
この時期の代表作として、

鏡石町鏡田、西光寺（総代鏡
沼村大庄屋、常松敷紹（市原
綱稠の弟）の依頼で制作した
杉戸二十面に「浚煙閣功臣画
像（十二面）」「牡丹に孔雀の
図（四面）」「岩に牡丹の図（四
面）」の作品がある。現在、こ
の杉戸絵は、県指定重要文化
財になっている。

また、「岩瀬郡須賀川町耕地之図」は高遠法による鳥瞰図で描かれ、当時の町絵図を代表するものである。

白河藩御内寺で
編纂に専念

集古十種の編纂も大詰めに近づいた寛政十一年、定信は白雲を白河藩御内寺常宣寺十二世として迎え、編纂に専念させた。十一年と十二年の二度にわたり、白雲を関東以

西、四国地方へ収集の旅に出した。このとき各地の風景などを精力的に写生した。その主なものに「東海遊覧」「西々遊行誌」がある。このほかの写生帖には「富岳絶頂の図」などもあるところから、富士登山もしたと思われる。この写生は、のちに本絵として描かれて今に伝えられている。

寛政十二年（一八〇〇）、集古十種が刊行の運びとなつた。定信は、これを翌享和元年四月、將軍家斉に献上した。

その後、白雲は文化三年か

ら九年まで、栃木県黒羽町常念寺に滞在。同年十一月、四十八歳のとき、秋田県六郷町本覚寺に住職として移り、制作の傍ら、各地を写生して歩いていたことが、残されている。写生帖から知ることができる。一生の大半を資料収集と写生にかけた白雲は、文政八年（一八二五）、本覚寺で、その生涯を終えた。六十一歳であった。現在、白雲の作品は、江戸画壇の「洋風画」として重要な位置を占めている。



50歳ごろの道山草太郎

特に、終生の語り草にしていた人物に竹久夢二（一八八四年～一九三四）がいた。夢二はアール・ヌーヴォー的で獨白の夢二式美人画を描き、大正七年、中退して帰郷、家業を継いだ。この時期、彼は多く

七）二月十七日、東六丁目十三番地（現中町）商業道山長男として生まれる。茂兵衛の長男として生まれた。幼名を守三と称したが、十一歳のとき、父と死別、家督を相続して名を茂兵衛と改名した。

その後、県立安積中学校に入学。大正三年（十七歳）、早稲田大学に進学したが、大正七年、中退して帰郷、家業を継いだ。この時期、彼は多く

の師と友人を得たのであつた。

広報すかがわ 2.9.1

中町、茂兵衛の長男として生まれる

七）二月十七日、東六丁目十三番地（現中町）商業道山

竹久夢二と親交が

の師と友人を得たのであつた。

須賀川の人物史

桔梗吟社創設の一人
道山草太郎

（一八九七～一九七一）

33

大正10年
乙夜会に入会

大正十年、須賀川銀行に勤めていた草太郎は、乙夜会（広

した。夢二は旅行が好きで各地を訪れ、旅先では遊興に明け暮れて金が無くなると、旅館で絵を描き、知人に金策を頼んだという。夢二は、福島県内のうち、三春、船引、福島、若松、喜多方、東山などに数回来ていた。このとき旅行の拠点である郡山には、宿泊することも多く、ここでの金策は草太郎に頼んだこともあつて、須賀川市内には十数

原石鼎を生涯の師に

十一年五月、楳郎、草太郎、原石鼎の主率者原石鼎を牡丹園に招き、句会を開いた。このとき、桔梗吟社結成の運びとなつた。創立同人は前記の三

点の夢二の作品が好事家の間にもたらされた。しかし、昭和三十年ころから夢二ブームになり、多くの作品は東京の画商の手によって流出したが、残された作品をみると、草太郎と夢二の交友関係を知ることができる。

また、吉田絃二郎（一八七六年～一九五六、小説家、隨筆家、早稲田大学講師）からは、宗教的感情から的人生や自然に対する愛情についての教えを受けた。これらは、草太郎俳句の中に溶け込んでいったものと思われる。

六年には、芭蕉二百年祭を行って「早苗のみけ」を発行した。また、父、茂兵衛も藻玉と号した俳人であった。



夢二作の「黒船屋」（大正9年）

の竹内翠玉（憲治）ほか四人の九人であった。

以後、草太郎は石鼎を生涯の師として敬慕し、村上鬼城や渡辺水巴を知り、研鑽を積んだ。また、芭蕉についての研究も深く、昭和十一年、俳誌

鹿火屋に五回にわたり「芭蕉雜記」の論文を寄せている。この論文は彼の当時の心境を述べているようにも思える。

戦時中は桔槔を がり版刷りで発行

この年以降、松島瑞巖寺僧

堂で、約十年間参禅修業を続

けた。この間、大東亜戦争による統制経済で、桔槔の印刷、製本ができなくなつたとき、彼はがり版刷りで発行し、二十三年の復刊まで休むことなく続けた。これが七百七十五号続けてきた桔槔の歴史の一コマである。

現在、会員は約六百人、会長は高久田橙子が受け継いで

須賀川文化協会 創設に尽力

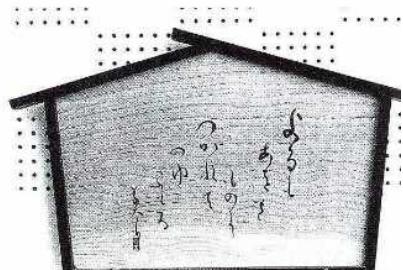
戦後、草太郎がまず手掛けたのは「須賀川文化協会」の創設である。これが現在の須賀川文化団体連絡協議会と発展して、初代会長に推挙された。また、牡丹園保勝会の設立に尽力し、記念碑の撰文ををしている。

このほか、須賀川市社会福祉協議会長、須賀川市町内会長会長、須賀川観光協会長などを務め、昭和四十七年（一九七二）二月十三日、午前六時二十分、七十五年の生涯を閉じた。

遺体は、遺言によつて献体し医学の上に貢献した。

死の前日、草太郎の病床を見舞つた桔槔の俳人たちに書き取らせた「七十五じやものもうよかろうと寒の水」が辞世の句となつた。

これは、飄飄とした風貌の中から計りしれない博識をはじめ出していた、彼の人柄をしのぶことができる。



道山草太郎の俳句絵馬

いる。

手腕のほかに文化面にも活躍している。二十二歳年下の妹、市原多代女が心身症に陥ったときに、俳諧の道に入ることを勧め、江戸末期の女流俳人として大成させた。(広報すかがわ昭和六十三年五月号・「須賀川の人物史」参照)。

画僧白雲も綱稠の援助が

また、江戸洋風画壇に足跡を残した画僧白雲も彼の後援によるところが大きかった(広報すかがわ平成二年八月号・

「須賀川の人物史」参照)。

白雲の作品で知られている「須賀川町耕地之図」は、町会所で領主が領内巡視に来たときの説明用に制作させたものと思われる。この裏付けとなる資料が、須賀川市史近世編の資料調査のとき、市原家蔵

町会所関係文書の中から、耕地の図の下絵が発見されたことによつてうかがうことができる。ほかの画家や文人たちも残されている資料や作品などから、彼との交流を知ることができる。

綱稠も酒屋藏人と号し狂歌を詠む

綱稠も、号を峯巒亭藏人、酒屋藏人として、狂歌を詠んだ。四十二歳の初老の年祝いのとき、江戸の狂歌師浅草庵市人や、桑葉庵千則、曼鬼武などからの多くの祝歌と浮世絵師窪俊満の挿絵で狂歌集を出版した。また、江戸や地方の狂歌集と石井雨考編の「青蔭集」などに歌が入集されている。

天明から文化年間の約三十年間、須賀川の各方面に献身的に貢献した綱稠は、文化十三年(一八一六)二月二十日子上刻(午前〇時ころ)伽し給ふ人々へ

私は今日此世をさけの魚ならて、ひつの命をひろひけるかな
を辞世の歌として、六十二歳の生涯を終えた。(永山祐三)



小倉村講中が
満福寺に奉納

今から百八十八年前の享和二年（一八〇二）、東堂山満福

詣人たちには感嘆の声を挙げた
ものと思う。

この結果は、農林や林産など

須賀川の人物史

田善の絵馬を奉納した世話人

35

山田仙吉

八九

寺觀音堂へ田村郡小野町大字小戸神の長押に、地方の人人が見たこともない油彩画の「洋人曳馬図」の大絵馬が掲げられた。この時、ほかの絵馬は圧倒され、これを見た参

中を作り、亞欧堂田善（広報すかがわ昭和六十四年一月号「須賀川の人物史」参照）に依頼して奉納したものである。図柄は、ドイツの銅版画家ヨハン・エリアス・リーデン

現存する田善の
絵馬は全国で2占

田善作の絵馬は、記録に見るもの二点、現存するもの二点の四点であるが、記録の

面に「奉納、享和二年七月
吉日、岩瀬郡小倉村講中」と
ある。この絵馬は、江戸洋風
画を代表するもので、昭和十五年、
福島県重要文化財に指定された。

点は焼失したものである。また、東堂山觀音堂も、大正五年、火災に遭つたが、田善の絵馬だけ下の本堂に移しておいたので幸い難を逃れたといふ。

ここで私事になるが、昭和三十七年十一月、東堂山を初めて訪ね、絵馬を拝見した。このときから、小倉村講中とは、どのような人たちであつたのか？ 以後、各種の調査の

年、須賀川水道五十年史の資料収集のとき、小倉油池近くの供養塔群の中の、石灯ろうに「奉納、東堂山、享和二年三月吉日講中埋平三人、中作二十六人、世話仙吉、平次郎内壹人、三十人」と銘あるのを発見した。

この年号は絵馬と一致するものであり、絵馬を奉納した記念と部落内でいつでも参拝

小倉油池近くの石灯籠

できるようになると建てられたと思われる。

仙吉は小倉の 山田一徳さんの先祖

その後の調査によつて、世話人仙吉は、小倉字前仲作八十五、山田一徳さんの先祖で文政十二年（一八二九）に没している（生まれ年は不明）。また、石灯ろうの建つている土地も同家の所有地で、小倉字高田一五〇である。山田家は代々、神仏の信仰心が厚く、東堂山や出羽三山参詣の世話をしていたといわれている。

江戸時代、小倉地区は四つの組に分かれていた。二番組仲作は山吹、滑津、後仲作、前仲作の部落で組織された。ちなみに二番組は、慶安三年（一六五〇）戸数十四戸、明治四年（一八七一）戸数二十九戸であるところからみると、享和二年に絵馬を奉納したときには、全戸の戸主が講中に参加したと考えられる。

小倉地区には現在、東堂山灯ろう三基、東堂山供養塔一基、馬頭観音供養塔四十三基がある。

（永山祐三）

須賀川羽子板は、あまり一般の人たちには知られることもなく、一部趣味人の間で話題にのぼるくらいである。しかし、平凡社刊「世界大百科辞典」羽子板の項に、人形・玩具研究家の山田徳兵衛氏が「福島県須賀川などでは最近まで左義長（正月十五日に、青竹を立てて正月の飾り物を燃やした宮中の儀式）の羽子板を産していた」と、全国でただ一か所産地として特記している。

間、旧西袋村、大桑原・樽川源朝、袋田・樽川義丸、旧柱田村（現岩瀬村）・佐藤峯治によつて明治中期ころの最盛期には年間、三万枚生産したと



（一八五七—一九一六）

色彩の鮮やかさ 生産量とも日本一

須賀川羽子板は、あまり一般の人たちには知られること

べて、大きさ、絵付け、生産量が勝っていたからであろう。

須賀川羽子板は、明治十年ころから四十年代の約三十年の物産の集産地であったので、

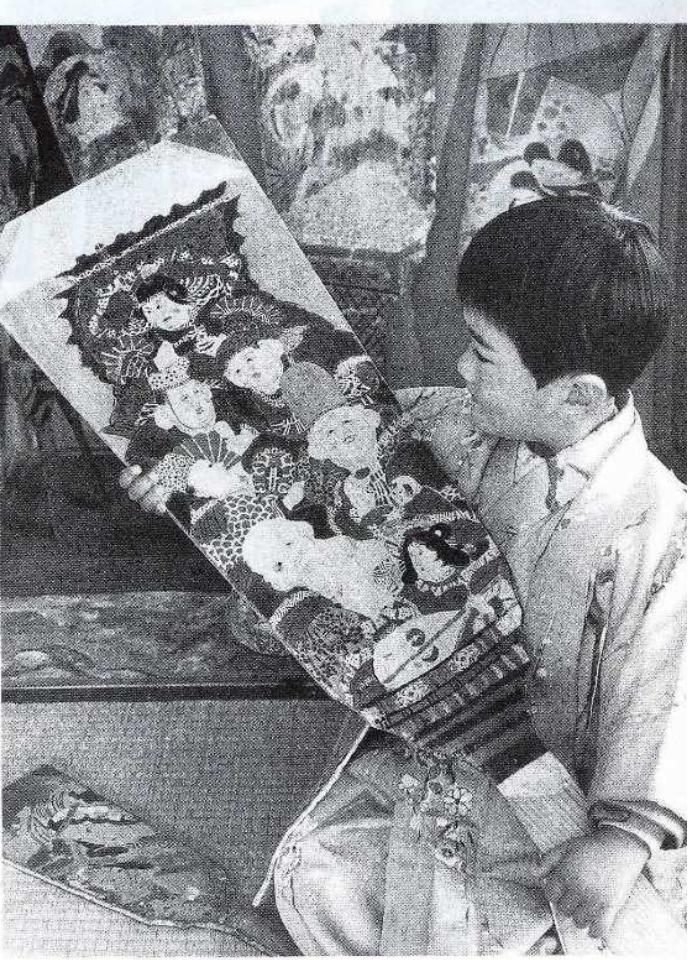
それは各地の羽子板に比

いわれている。

本来ならば、製品の名称は

産地名を付けるのが通例であるが、当時の須賀川は、県内

川地区で盛んであった地芝居の髪を作り「髪屋」と呼ばれていた。明治九年、朝日稻荷神社に奉納された芝居絵馬に「髪師樽川源重」と記されている。



須賀川羽子板

地方で作られた羽子板の中では、全国一の生産規模を誇った。写真は一番型の羽子板で七福神の図柄（大きさ約1m）

長女の誕生日祝いに 作つたのが最初

なぜ大桑原の農村部で羽子板作りが行われるようになつたのかについての記録などは残されていないが、羽子板生みの親、樽川源朝は、安政四年（一八五七）七月七日、大桑原村字日向百二十八番地、農業樽川伴右工門の長男として生まれた。

このころ、源朝の祖父源重（一八二四—一九〇〇）は、西川地区で盛んであった地芝居の髪を作り「髪屋」と呼ばれていた。明治九年、朝日稻荷神社に奉納された芝居絵馬に「髪師樽川源重」と記されている。

「歳の市」に出荷 大好評となる

羽子板がきっかけとなつたのではないかと思われる。

当時、須賀川は宿場町として栄えており、東京製の質の良い押し絵や描き絵の羽子板も移入されていたことである。が、これらは高価で農家や町の人々には手が出なかつたので、安価で見栄えするだれもが喜んで迎えられる物が求められていたのではないか。

源朝が作つた初期の羽子板が数点残されている。これらは、明治十二、三年ころと多く描き、大きさも三十センチ前後から一㍍くらいまで数段階のものを作つた。それを各地の「歳の市」に出荷し、新年に女の子の初正月祝いに座敷に飾られ、大好評を得たといふ。

明治中期には 年間3万枚の生産

羽子板の需要も順調に伸び、事業拡張の話を大桑原村、袋田村両村の戸長（村長役）をしていた大桑原村新田、一階堂正武（一八三四～一八九四）にしたところ、正武は元修験

者同士で親父のあつた袋田村本郷、樽川義丸（一八五九～一九二五）と弟の佐藤峰治（一八六三～一九一七後に柱田村に行き佐藤姓となる）に羽子板作りを勧め、源朝から習つて製造に参加した。

中期には年間約三万枚の生産量になつたと言われている。

押し絵や描き絵に 市場を奪われる

このように順調な生産を続けていた須賀川羽子板も、明治三十五、六年ころ、東京から新しい正月商品、祝い掛け物が須賀川をはじめ、各地に出来わり、羽子板と一緒に店頭で売られた。このころから贈り物も羽子板から掛け物へと変わり、羽子板も下り物の華麗な押し絵や描き絵の物に市場を奪われた。明治時代、女の子の初正月の贈り物として関東、東北地方各地の店頭を賑わした須賀川羽子板も大正初期には、その姿を消したという。

現在、須賀川羽子板は日本玩具史上、高く評価されており、現存している羽子板は地元市立博物館や東京国立博物館、その他各地の博物館、民芸館、収集家などに約百枚保存されている。

生産量が多くなるにつれ、図柄も時代を反映して美人画や福の神のほか、日清、日露戦争のときには明治天皇と皇后、軍人などの絵も描かれた。

えたという。

覚は十五歳のとき、二百石を賜り大番組となつた。その後、小納戸役、唐物奉行を経

て天和三年（一六八三）、彰考館のスタッフの一員に加えられた。この年、同僚の佐々宗淳（一

六四〇～一六九八、通称介三郎、水戸黄門の供「助さん」のモデル）は、史料収集で須賀川代官、相楽家を訪れ「白

河結城文書」の写取を行つた。現在、この文書と宗淳の書状は、国的重要文化財に指定されている。

彰考館総裁に38歳で抜てき

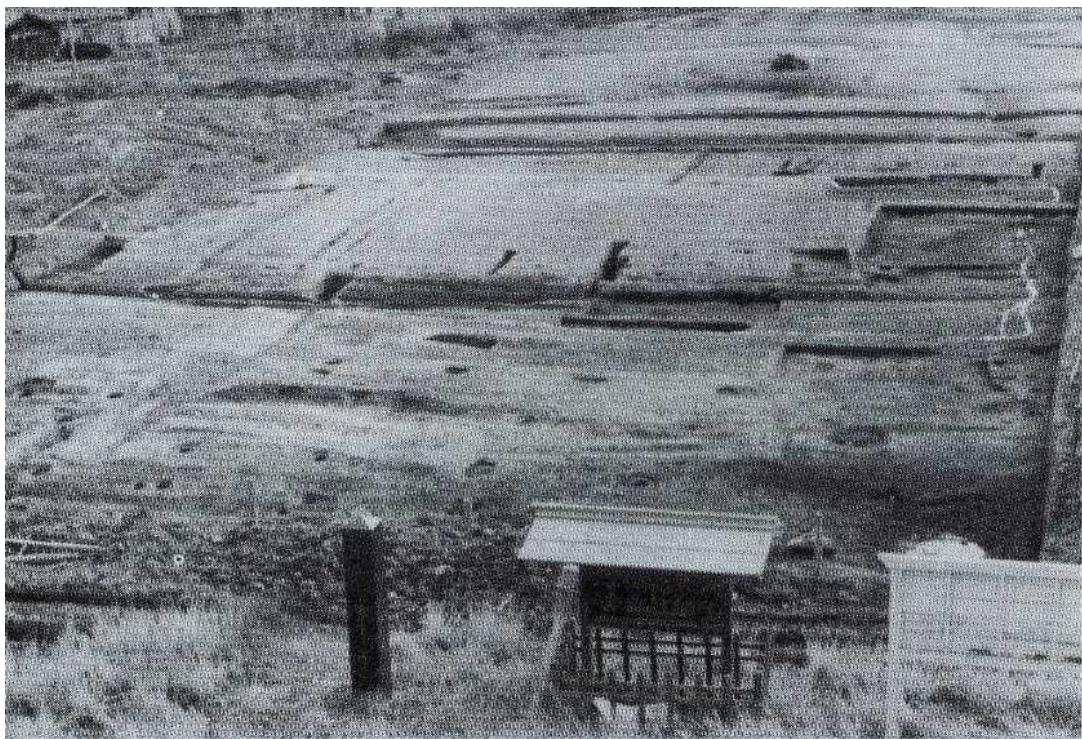
元禄六年（一六九三）三十八歳の覚は、彰考館総裁を命ぜられ、大日本史編さん尽力した。特に、光圀が力を入れた朱子学の歴史観にもとづいた道徳の理法を、歴史の中から正しく学びとるという思想が、彼の中でもはぐくまれ、体力と能力は衰えを知らず、十八歳まで編さんに携つて、大きな業績をあげ、「水戸学」の祖といわれている。

享保十八年（一七三三）三月二十日、三代藩主綱条は、覚に多年の彰考館勤務をねぎらい時服を贈つた。彼もこのとき退き、「老牛」と号して余生を送つたが、その合い間に十人の合力（助手）を供にして彰考館の手伝いをしたといふ。この事業は歴代藩主によつて受け継がれ、明治三十九年、完結まで二百五十年を要した。一生を大日本史編さんと水戸学の確立に尽くした覚は、元文二年（一七三七）十二月十日、その生涯を終えた。八十二歳であった。（永山祐三）

須賀川の人物史

古代から中世編

38



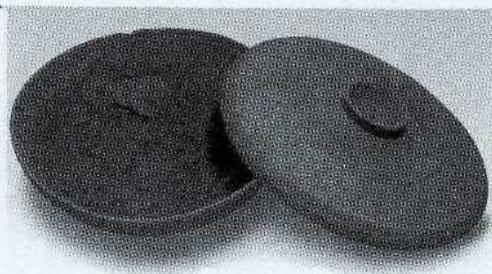
国指定史跡「上人塙廃寺跡」(須二中南側から須賀川駅方面を望む)

昭和六十三年一月号から連載中の「須賀川の人物史」は、三月号で一応終了させていたります。これまで円谷英二特撮監督をはじめ三十七人の方を紹介してきましたが、いずれも大変ご好評をいただきました。今月号と来月号では、須賀川発展のために活躍された人物をまとめて紹介します。

建弥依米命が 石背国造に任命

須賀川地方の、人の名が文献の上に現れるのは、五世紀ごろ石背国造に任命された建弥依米命である。その父、建許呂命は石城国造として「国造本紀」に出てくる。それから約三百年後の養老二年(713)、陸奥国から白河、石背、会津、安積、信夫の五郡を分けて「石背国」ができた。国の役所である国

府は、国名の地に置かれたことが「続日本紀」に記されている。県内では初めて出土したの和貨当时(昭和62年)の須恵器(6枚)が重なって入っていた。



高月左大弁が 石背国司に任命

数年前までは、石背の国府の所在地は不明であったが、昭和三十六年から発掘調査が行われた上人塙廃寺跡、その調査で出土した遺物や遺構か

吉弥候部上人が 磐瀬郡司に任命

「続日本紀」に、神護景雲三年(766)、磐瀬郡司に任命された吉弥候部上人が出ている。上人は大領として外正六位上に任せられて、磐瀬朝臣の姓を賜った。この磐瀬氏は

国立歴史民俗博物館発行の研究報告書第十集「古代の国府の研究」で発表された。

その後、国府に関連のある遺跡が次々に発掘調査され、昭和六十二年には、中宿「うまや遺跡」から、国府の役人に給料として支給したものと考えられる、我が国最初の通貨「和同開珎」と「胸衣壺」が発見された。

国府の国司は、中央(奈良)から派遣され、郡司を統轄した地方官であった。石背国司に任命されたのは、高月左大弁で、その支配下に前記の五郡が置かれた。当時、国司の任期は六年間で、上人塙に国府が存在した期間はこの間だけであったと考えられる。石背国は、その後「陸奥国」に統合された。

前述の建許呂命の子孫で、人上以来磐瀬郡を支配した。ほかに、上丈部宗成、磐瀬朝臣富主、磐瀬朝臣長宗、大伴宮城連などの名が記されている。

糸井国数らが 磐瀬庄司の傘下

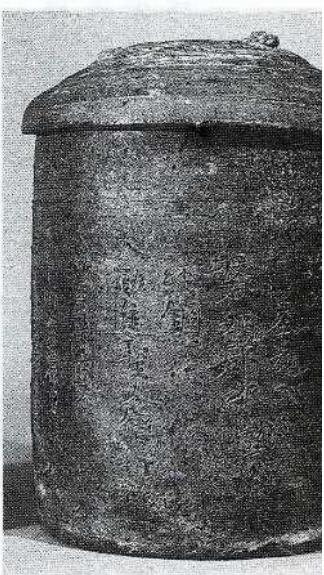
平安時代になると東北地方は、平泉（岩手県）の藤原氏が巨大な力を持ち、陸奥政府を開府し、鎮守府将軍に任せられて陸奥国を掌握した。磐瀬郡もこの支配下にあって、平泉との交流があつたことを知る資料が、上人壇廃寺跡から発掘された。これは平泉中尊寺に伝えられた。

この経筒には、経塚を造営した、僧と施主で糸井国数、藤原貞清、白井友包、藤井末遠の名が刻まれている。この四人は同時期、福島天王寺、桑山寺跡から承安元年（一一七一）、銘の経筒が出土している。

川中郷（旧磐瀬郡）は 二階堂家の支配下 文治五年（一一八九）、源

川中郷（旧磐瀬郡）は、得宗被官の二階堂行朝（行珍）に与えられ、行朝は岩瀬山（現愛宕山）に築城し、守谷館を居館とした。

折平沢寺にも経塚を造営している。これらの人物は、平泉藤原氏の支配下にあり、地方名主として農業を営む傍ら、武士団を構成し、磐瀬庄司の傘下にあつた者たちと考えられる。



3号経塚から出土した「陶製外筒」。現在では、「岩代米山寺経塚出土品」として国の重要文化財に指定されている。

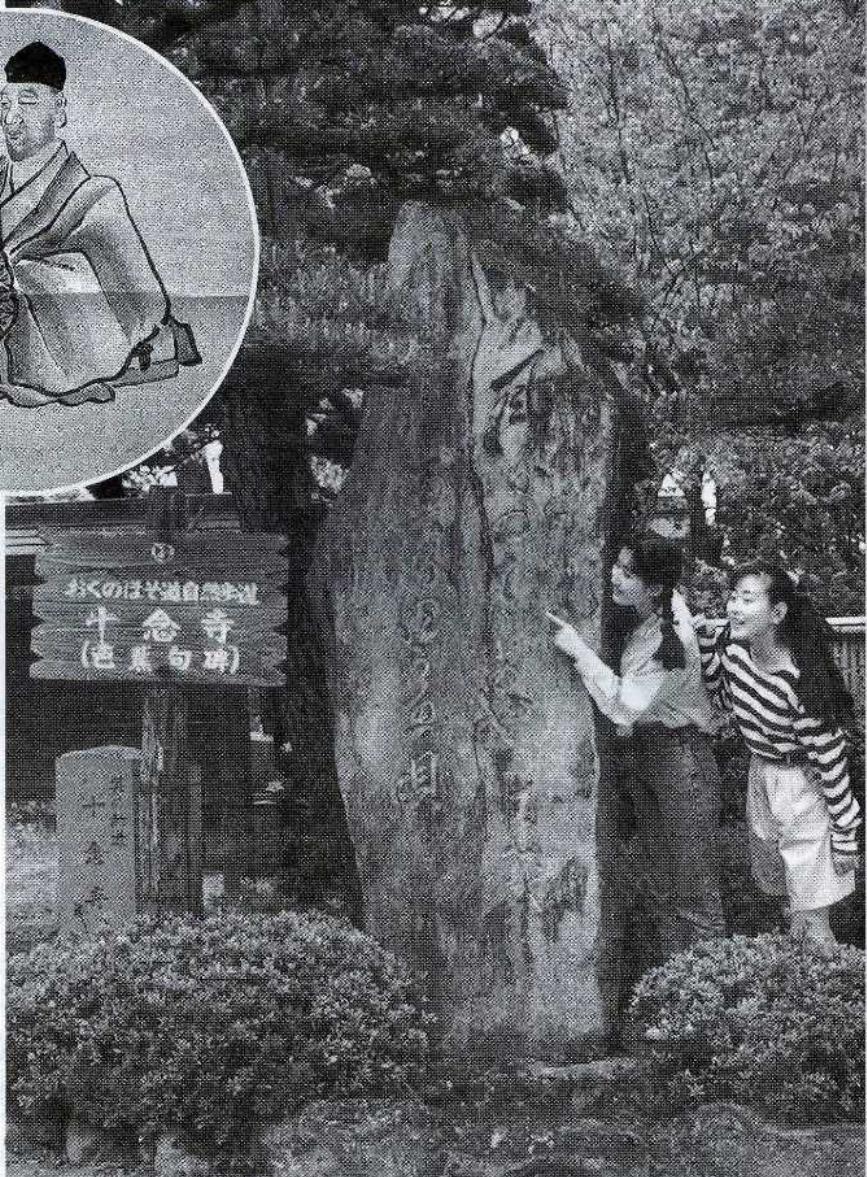
行村は岩瀬郡の中央である稲村に築城した。行村は幕府重臣として重用され、常に居城せず、代々、代官を派遣していたと考えられる。この行村を祖とする二階堂家は「稻村二階堂」と称されている。

FCT「ふくしまの素顔」 ・**亞欧堂田善、特集**

本市が生んだ偉大な銅版画家・亞欧堂田善の特集が、福島中央テレビ「ふくしまの素顔」の中で放映されます。どうぞご覧下さい。
※放映日時 3月3日(日)
正午～0時30分

天正十七年 伊達政宗により滅亡

阿武隈川東部の川東郷は、岩瀬氏に代わって塙田陸奥入道国時の奥州所領支配の拠点が置かれた。岩瀬氏は領地を分断され、下宿郷と一、三の村のみとなつた。下宿には顯国魂神社があり、古来から祭主は律令国造の職とされていた。これら人物によつて中世の須賀川地方は統一されてきたが、天正十七年（一五八九）十月二十三日の伊達政宗の攻撃によつて落城し、二階堂家四百年にわたつた支配は終わつた。が、古代から中世にかけて須賀川地方に尽くした人物は多くおり、これらの人たちについても調査しなければならないと思われる。（永山祐三）



十念寺境内にある芭蕉の句碑と円内は市芭蕉記念館の芭蕉翁像(谷文中作)

破棄と宿駅の整備事業で、現在の市街地の基となつた。

会津若松

若松

で天下統一の

奥羽仕置きが行われる

同十八年(一五九〇)七月

五日、関東の雄北条氏直を降

伏させた豊臣秀吉は、十七日

に小田原を進発し会津へと向

かつた。

その途中で江戸城を徳川家

康に引き渡し、宇都宮では、

北関東諸大名の処遇と臣従を

決定して、八月九日、会津若松

に到着した。

ここで秀吉の夢であつた天

下統一の最後の舞台で、奥羽

仕置きが行われた。

下統一の最後の舞台で、奥羽

仕置きが行われた。

決して、八月九日、会津若松

に到着した。

ここで秀吉の夢であつた天

下統一の最後の舞台で、奥羽

仕置きが行われた。

決して、八月九日、会津若松

に到着した。

ここで秀吉の夢であつた天

下統一の最後の舞台で、奥羽

仕置きが行われた。

決して、八月九日、会津若松

に到着した。

須賀川の人物史

近代から現代編

39

手中に収めた伊達政宗は四十

日間滞在して、須賀川城を石

川昭光(石川城主)に与え、戦

後処理とまちづくりを命じた。

昭光は、家老の矢吹蘿摩を

城代とし、与力に稻村二階堂

天正十七年(一五八九)十月

二十六日の合戦で、須賀川を

石川 昭光らが

戦後処理とまちづくり

家の総領保土原江南斎をはじめとして浜尾漸斎、岩渕近江、

守谷筑後、矢田野伊豆、横田

治部などを置いた。

このとき旧城内を中心にで

きた基本設計は、須賀川城の

十ヶ月の伊達家支配から、新

伊達家支配から
蒲生氏郷の領地

建)

慶長六年(一六〇一)、関ヶ原の戦いで、西軍に荷担した

景勝は、会津から米沢に移封

され、須賀川も上杉家の支配

から離れた。

景勝は、このとき諫訪明神(神炊館神社)に石の鳥居を奉納した。(現在あるのは後に再建)

たに会津若松城主となつた蒲生氏郷の領地となつた。氏郷は須賀川を、妹婿の田丸中努(小輔)に与へて治めさせた。

具直は、前田川用水、小倉用水などの治水事業に力を入れ、その事業やまちづくりの担い手には、旧二階堂家の家臣で須賀川に土着したものを起用した。

具直は、前田川用水、小倉

用水などの治水事業に力を入れ、その事業やまちづくりの担い手には、旧二階堂家の家

臣で須賀川に土着したものを起用した。

須賀川俳壇の基を
築いた芭蕉

このころ江戸幕府は、街道と宿駅の整備に力を入れた。須賀川を通っていた当時の国

道は、古代からの「東山道」で、街の東側にあつたが、新道の開削で「奥州道（街道）」となり、新しい街の表町、南・北に接続されて、宿場町須賀川の機能が發揮できるようになつた。

亞歐堂田善は 銅板画の先駆者

派須賀川俳壇に、蕉風の新しい風を吹き込み、連綿と三百年の歴史をもつ須賀川俳壇の基を築いてくれた松尾芭蕉（六四四—一六九四）ではないだろうか。

め、寛政の改革を行つた白河藩主松平定信（一七五八—一八二九）は、亞欧堂田善を見い出し、銅版画・洋風画の先駆者といわれるまで育てあげた。田善の弟子、安田田驥、遠藤田一なども藩の御用絵師として抱えた。

この時期は、須賀川の江戸文化が華を開いた爛熟期で、茶人の一機庵宗仲、彫刻家の佛師左門、漢学者の吉田柳陰、江戸に出て検校の位にまでなつた岩瀬検校がいる。岩瀬検校のことは定信の退閑雑記にも記してある。

須賀川の人物史終了

これまで、須賀川の人物史として三十九回にわたり掲載してきたが、この中には須賀川で終生過ごした人、須賀川に生まれて外に出た人、外から来て須賀川を終の住み家とした人たちがいる。

須賀川には、このほか各分野に尽くした人々が多くいるが、これらの人物については今後の課題としたい。